

第十二章

海軍免官後の木村駿吉

——大正四年～昭和十三年——

十二・一

大正四年〜大正末年

特許弁理士と日本無線(株)

役員としての木村駿吉

◎大正四年〜七年の記録

◇大正四年三月(一九一五年)

この月、海軍船橋無線電信所が竣工した。第一次大戦の余波による辛酸のあげくであった。

機械はテレフンケンの瞬滅花火式で、電力は二〇〇キロワット、アンテナ鉄塔の高さは二〇〇メートルという巨大なものであった。

この無電所に関する秋山眞之の苦労は前述した。

◇大正四年五月十八日(一九一五年)

木村駿吉、特許「オゾン発生装置」を出願した。

この時期、駿吉はオゾンの利用に関する特許や実用新案を多く出願している。

日露戦争用無電機の開発中に火花放電によるオゾンの発生を経験し、その応用を考えたのであろう。

ただし出願数が多かったわりには登録は少ない。

図12・1に、登録された特許と実用新案を四件示した。

なお出願登録書類によって、当時の駿吉の住所が判明する。豊多摩郡中野町で、晩年を過ごした家である。

◇大正四年六月十九日(一九一五年)

無線電信に関する法律はそれまで有線電信法の準用だったが、この日初の「無線電信法」が法律第二十六号として公布された。施行は同年十一月一日であった。

◇大正四年七月(一九一五年)

この月、完成したばかりの海軍船橋無線電局とハワイ

との間の超遠距離無電通信に成功した。

◇大正四年十月（一九一五年）

内令兵第二五号によって、テレフンケン製無線電信機が兵器として制式化された。内令兵はかつての内令に相当した制度である。

それは次のように分類されていた。

- 「T式一号送信機（電力三二kVA高周波交流）」
- 「T式二号送信機（電力一二kVA高周波交流）」
- 「T式四号送信機（電力三kVA高周波交流）」
- 「T式一号受信機（波長一一〇〇〇mまで／音響式）」
- 「T式二号受信機（波長六〇〇〇mまで／音響式）」
- この他、

- 「T式甲号送信機」
 - 「T式三号送信機」
 - 「F式二号送信機（フェッセンデン式）」
 - 「M式一号送信機（マルコーニ式）」
 - 「N式一号送信機（日本ラジオ式）」
- もあつたらしい。

◇大正四年十二月二日（一九一五年）

無線通信の運営と製造に執念を持っていた起業家の加島斌は、製造会社「匿名組合日本無線電信機製造所」の設立を企画し、技術の中心となる人物を招くために通信省電気試験所の鳥潟右一に相談した。

鳥潟は公平な人物で、通信省と対立しがちな海軍畑の木村駿吉が退官したのを知って、推薦した。

駿吉は喜んで参加し、創立時の役員となった。

現在の「日本無線(株)」の前身である。

書類の一部を図12・2に示した。

駿吉は当時興味を持っていたオゾン発生機などを熱心に推進しようとしたらしい。

しかし駿吉は元々組織人ではなく、一人で頑張る学者肌であり、技術組織の運営も加島斌が中心になったらしい。

この月駿吉は、『工業に於けるオゾンの利用』を出版した。書影を図12・3に示した。

似た内容の雑誌記事もいくつか見られる。

駿吉の熱意が分かるが、この技術開発は成功したとは言い難かったようである。

覚 書

東京市小石川区小日向台町1丁目46番地加島斌（以下甲と称す）、東京府豊多摩郡中野町字中野3322番地木村駿吉（以下乙と称す）、東京市芝区白金三光町27番地沖馬吉（以下丙と称す）、東京市芝区高輪南町38番地木下英太郎（以下丁と称す）の4氏は、匿名組合日本無線電信機製造所を設立するにつき、大正4年12月2日次の契約を締結せり。

第1条 本組合を日本無線電信機製造所と称し、無線電信機及びこれに付属する諸機械及び材料の製造販売修理賃貸するものとする。

第2条 甲は本組合に対し、その労務を提供し、本組合の営業販売に従事し、無限責任を以て本組合を代表することを約束す。

第3条 甲は本組合の営業方針その他重要な用件に関しては、予め組合員全員の承諾を得た後実行すること及び毎月末会計報告を本組合に提示することを特に約束す。

第4条 乙は本組合に対し自己の学芸技術を提供し、本組合の製作物を監督し、技術上の責任を有することを約束す。

中略

第9条 本組合の利益の配分に関しては、乙は本組合の得る総収入の百分の五を受取り、甲丙丁は本組合の総収入より総支出を引去りたる純利益の三分の一宛を、各自受取るものとす。

第10条 本組合に損失を生じたる場合には、乙は技術上の責任を有するのみにて、その他の責任を有せず、丙丁は各自その出資に限り、その他の責任を有せず、甲の責任は無限なり。

中略

大正4年12月2日

加島 斌 木村駿吉 沖 馬吉 木下英太郎

図12・2 木村駿吉が日本無線(株)の前身である「匿名組合日本無線電信機製造所」の創立役員になった時の覚書



図12・3 工業に於けるオゾンの利用(大正4年12月出版)

◇大正五年九月二十一日(一九一六年)

逓信省が海軍の船橋無線局を利用することになった。これは軍用無線と公共無線の共用の最初とされる。

◇大正五年十月十四日(一九一六年)

設立されたばかりの「日本無線電信機製造所」において、木村駿吉の指導のもとに小島潔が遠距離用無線機を開発し、米国に送ってテストしたところ、二千哩を達成したとの新聞記事が出た。

大変な距離だが、電離層反射であることは確実なので、届いた距離だけでは評価はしにくい。回路構成などは不明である(図12・4)。

●無線電信界の新發明

▽小島學士獨特の一裝置

前海軍無線電信技師木村駿吉氏を技術監督として今春設立を見たる芝罘櫻田久保町日本無線電信機製造所技師學士小島潔氏は今春來木村氏の指導の下に最も簡單なる無線電信受信機の發明に苦心し居たるが過股獨特の一裝置を發明したるも日本内地に於ては民間に於て之が實驗をなすべき途なきより之を米國に送り實驗をなしたるに其結果意外に良好にして海上優に二千海里を距つる通信を受信し得たる報告に接したりと

図12・4 木村駿吉の指導で遠距離用無線受信機を開発したとの記事(読売新聞大正5年10月14日)

◇大正五年（一九一六年）

この頃の木村駿吉は、特許弁理士として「東京電気（東芝の前身）」の顧問になっており（顧問料一〇〇円）、その関係で顧問弁護士のアサキと渡米して活動した。訴訟に関する英文を書いたところ、その英語を褒められたそうである。

どうやらこの訴訟は、GE社のダクタリングステーション問題だったらしく、勉強家の駿吉はこのタングステンについての資料をたくさん書いている。

渡米して活動したのはもう少し後の年だったかもしれないし、何回も渡米したかもしれない。

なお岸弁護士とは、岸記念体育館でも知られる岸清一である。

二人の関係は、異色の画家川村清雄の後援でも密接だったらしい。

◇大正六年三月（一九一七年）

木村駿吉、「合資会社日本無線電信機製造所」の有限責任社員・顧問となった。

会社が合資会社になったことによる変更だろうが、技術の責任者としてはやや浮いた状態だったらしい。

◇大正六年四月十一日（一九一七年）

通信省電気試験所の鳥潟右一のチームは、精力的に無線電話の研究開発を進めており、高い感度で受信できる鉱石検波器や、独自の形式の瞬滅式送信機を作り上げ、明治四十五年に最初の無線電話実験に成功した。

これを大正期に入って実用的なものに改良し、「TYK無線電話」と称して、四八キロの無線電話通信ができるようになった。

そこでこの日から、伊勢湾周辺において、船便関係の連絡業務への利用を開始した。

初期においては、電話を使って電文を送ったが、最初の一年で一万五千を超える電文を送ったと言われる。これこそが、無線で電話を送る世界で最初の実用通信であった。

木村駿吉も無線電話には興味を持っていたが、実用化に関しては、鳥潟という天才のいた電気試験所の独走であった。

図12・5に当時の「TYK無線電話機」を示す。

また図12・6に、代表的な関連特許を示す。

◇大正六年四月（一九一七年）

この年の内令兵第四号により、「四年式送信機」と「四年式受信機」が兵器として制式化された。

前章に記した二年式の評判が良かったため、それらをさらに改良したらしい。

研究開発の本拠が東京に移り、人材が充実してきて、新機能の無電機が次々に作られていたことが分かる。

送信機は次のように分類されていた。

- 「四年式一号送信機（軍艦用三二kVA）」
- 「四年式二号送信機（軍艦用一二kVA）」
- 「四年式三号送信機（駆逐艦用）」



図12・5 鳥潟らのTYK
無線電話機
（世界初の無線電話の実用化）

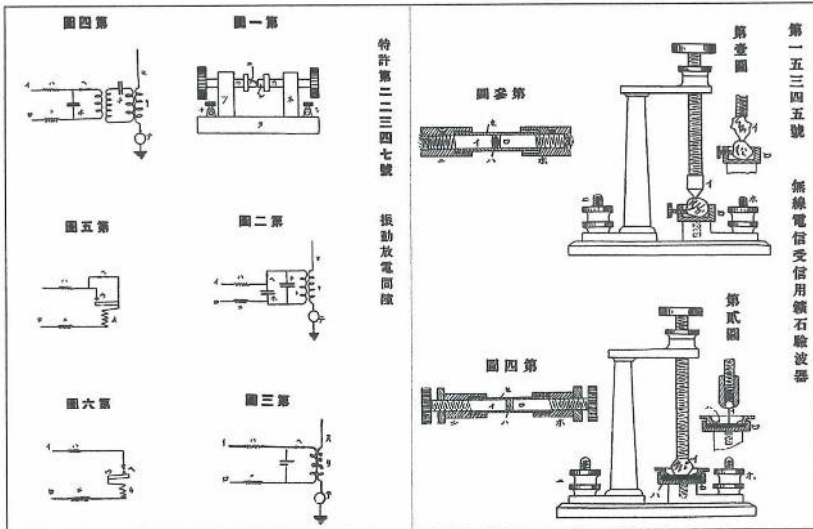


図12・6 鳥潟右一らの無線電話特許（右が受信機、左が送信機）

「四年式四号送信機（潜水艦用）」

これらは国産資材による製造が一つの特徴だった。

また、立体構造にして設置面積を減らし、同調回路をブリアジャスト式にして波長転換が一挙動でできるように簡便化された。

受信機は四三式を改良したもので、アンテナ同調を並列直列切替式にして待ち受け中は静電容量Cを外して帯域をブロードにし、受信中に同調をシャープにするようにしてあった。

開発のメンバーとしては、平岡善之丞・箕原勉・林冀一・大内善平の名が記録されている。

◇大正六年六月（一九一七年）

かつて木村駿吉の部下だった海軍の箕原勉造兵大技士によって、磁気飽和変圧器を用いた周波数通倍機が発明され、秘密特許（第一次大戦の教訓によってできた特許制度）となった。

これを用いた波長一万メートル（三〇キロヘルツ）の送信機を船橋で実験したところ、従来をはるかに上回る性能を示した。大正時代の日本技術が生んだ世界の発明だった。

この頃になると、電気理論の分野においても、日本独自の世界的研究が出るようになってきた。

◇大正六年六月（一九一七年）

松代松之助が「日本電気」東京本社総販売部長兼取締役になった。

◇大正七年二月四日（一九一八年）

秋山眞之が没した。

ロシアに勝つために生まれたといえる希代の参謀であつた。

◇大正七年十一月二十八日（一九一八年）

木村駿吉、『ダクチル、タングステンの発明』を出版した。特許弁理士としての仕事の必要上調べた結果を本にしたのであろう。

この本の肩書きに従四位とある。大正二年に退官してから従四位にあがったのであろう。

またこの本の巻末に特許弁理士としての広告が出ている。これを図12・7に示した。

弁理士として活動した記録の例を図12・8に示した。

謹告

○内外特許出願之件
○内外特許訴訟事件
○内外特許譲渡讓受之件
○歐米學術雜誌ニ發明發表之件
右御依頼ニ應ス
東京市日本橋區本町三井第二國術木村事務所
元海軍技師
從四位勳三等
米國理學博士
特許辨理士 木村駿吉
電話本局三〇四二番

図12・7 弁理士広告
(再掲)

図12・9は、電波研究委員會の端緒となった無線談話会(大正七年六月十四日開催)の写真で、木村駿吉のほか、鯨井や鳥潟など、無線界の著名人がずらりと並んでいる。

あとになったが、著作の書影を図12・10に掲示した。

◇大正七年(一九一八年)

月日ははっきりしないが、駿吉はこのころ、Book of Data and Factsを出版した。東京電気の顧問としての特許問題調査

結果を本にしたらしい。

◎大正八年〜十五年の日録

◇大正八年一月二十七日(一九一九年)

木村駿吉、「電熱器についての注意事項」を新聞に発表した。事故が起こりやすかったのであろう。

◇大正八年六月九日(一九一九年)

軍令部長の島村速雄と海軍大臣の加藤友三郎の間で、海軍大演習でアーク式無電機を使用する件についての商議があった。

アーク式が海軍で注目されていたことが分かるが、この形式は短期間で真空管式に駆逐された。

(次項参照)

◇大正八年十一月(一九一九年)

内令兵第一七号によって、大正七年制式の無電機が兵器となった。

特許第三一九三八號

第五十六類

大正六年十二月二十四日

ホレース、パール、ブラウン

明
細
書

紙製手拭及薄葉紙裁斷疊之機械

說明ノ性質及目的ノ要領

[illegible]

五十五

特許第三三八二四號

第四十六類

大正六年八月十一日
大正八年二月十九日

亞米利加會衆
ナウスプーロ

牽引車ノ車框機構

[illegible]

六十九

特許第三二七六號

第二十八號

大正七年六月三日

ロバート、ビー、エルダー

同陽乳、候、迎、朝

其目的在於處理各類實業及金融業務

ヲ分額セントスルモ在リ

南島嶺南ノ本發明ヲ具體化シタルモノヲ示シ第一圖ニ「インジゲン」製ノ聚硫磺鎖ニ本發明ヲ應用シタルモノ、
 硫磺質ハレタニ第二圖「第一圖」著一五條上ノ條條ヲ示シ第三圖「インジゲン」製造機ニ本發明ヲ應用シタルモノ、
 製造機圖ヲ示シ第四圖「第一圖」硫磺口ヲ有スルモノヲ示シ本發明ヲ應用シタルモノ、硫磺質ヲ示ス

百三十五

生 命 之 光 輝

三十四年七月一

604 4. J. J. P. van den Brink et al.

2. 天竺 2. 天竺 2. 天竺

[illegible]

工且ノ部ヲ示ス鐵道要ノ物

電機材料部の特重な職能は、メタ第四圖ニ於テ、絶縁材料、上下メタ清ナリ其他は、炭素、電子水素磁器、眞珠ノ絶縁物ヲ使用スルハ一般に人間部ニ於テハ、メタナク、レハ之ヲ略シ、ヒ子孫外、外全部ニ「オウバケテ」ニシテ、メタ絶縁ノ道ヲ進ムモノトシ、但レ内部ノ故障有無ノ取調ニハ、ヒ「ア」ゾ「取具」ヲ要シ、メタナク、レハ、メタ

其二 趙情選

図12・8 木村駿吉が弁理士として処理した特許の例(大正時代)

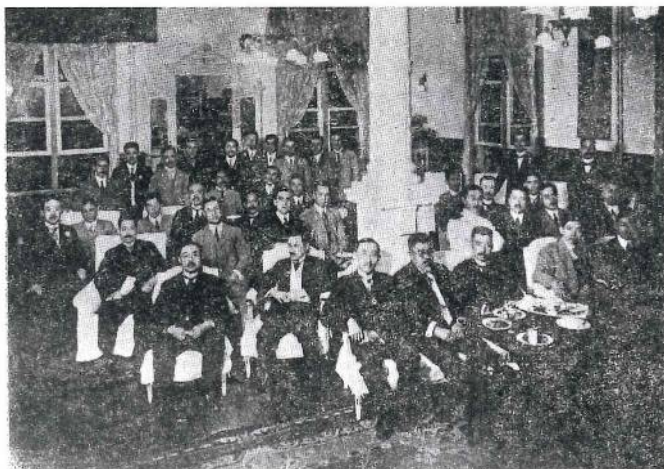


図12・9 電波研究委員会の端緒となった無線談話会
(大正7年6月/中央柱の右下が駿吉、左が鯨井、右一人おいて鳥潟)



図12・10 特許弁理士としての著作
(大正7年11月刊行)

この時に、送信機としてアーク式（電弧式）が採用された。アーク放電が負の抵抗を持つことを利用して、連続した電波を発生させようとする構成である。次のように分類されていた。

- 「七年式甲号送信機（陸上用一〇〇kW）」
 - 「七年式乙号送信機（陸上用六〇kW）」
 - 甲号は佐世保用、乙号は船橋用だったらしい。
 - 「七年式一号送信機（入力三〇、一五kW）」
 - 「七年式二号送信機（入力三〇、一五kW）」
- 上二種は戦艦や巡洋艦用で、違いは電鍵方式だった

らしい。

「七年式三号送信機（五kW）」

「七年式四号送信機（五kW）」

上二種は駆逐艦など用で電鍵方式が異なっただけらしい。

「七年式受信機」

受信機はこの一種類で、当時の最新技術である真空管を用いた音響式だった。減衰波・不減衰波（連続波）の両方を受信出来、波長二万メートルの電波まで受信可能だった。

外国の特許に触れない機構を林房吉技師や大田周平技手が考えて開発したもので、艦船用としては初の連続波送信機だった。

しかし発信が不安定で使いにくく、まもなく真空管式に道を譲った。

◇大正八年（一九一九年）

無電機を扱ったジュール・ヴェルヌの小説『サハラ砂漠の秘密』が刊行された。

執筆は刊行のずっと前だったらしい。

（図12・11に翻訳書の書影を示した）

サハラ砂漠の秘密

ジュール・ヴェルヌ＝石川 漢 訳



図12・11 無電が出てくる
ヴェルヌの作品

◇大正九年二月（一九二〇年）

木村駿吉、「日本無線電信電話株式会社」の取締役となる。

会社の組織変更に伴う身分の変化だったのであろう。

◇大正九年四月（一九二〇年）

木村駿吉の「第十五回同人座談会での発言」が雑誌「同人」に掲載された。

同様な座談会の第十七回、第十八回の発言も同誌の

六月号七月号に掲載された。

当時の有名人が集まつての放談会である。

◇大正十年三月二日（一九二一年）

木村駿吉が、加島斌などと連名で、

「国際無線電信を官民協力して行う組織設立についての嘆願書」を衆院議長宛に提出した。

その一部を図12・12に示した。

おそらくは加島斌が中心となつて運動したのであるう。この考えは、やがて別の形で実現した。その結果が国際電信電話会社KDD（KDDI）の設立である。

◇大正十年三月三日（一九二一年）

皇太子時代の昭和天皇が、この日から九月三日まで、軍艦「香取」で英・仏・ベルギー・オランダ・イタリ―を歴訪なさつた。

この時、御召艦「香取」と随伴の「鹿島」に、「四方式一号送信機」が装備された。

これが、海軍が用いた火花式送信機の最後だったと言われる。

官民聯合無線電信調査委員会設置ニ關スル請願書	
歐洲戰前ニ在リテハ日本ノ外交政策ハ主シテ東洋ニ關定セラレ居タルカ爲メニ對外通商機關ニ對スル我日本ノ相繼的地位ハ今日ノ如ク適切ニ感セザリキ然ルニ一度日本カ歐洲ノ外交政策ニ現ハレ巴里ニ於ケル時和會議ニ臨ムニ及ヒ英米佛伊四大國ノ外交政策ノ有様及無様ニ依リ通商機關ヲ組織シ時ニ且ツ臨時國內ニ各本國政府トノ間ニ打合セテ了シ能ク時機ヲ失ハス其主眼ヲ貫徹セシメ關リ日本カ斯クノ如キ機關ヲ缺ケル爲メ非常ノ不利ノ地位ニ立チシ事ハ何人モ尙記憶ニ新ナルトコロナリ	
英米佛伊國ハ各々海陸電信ニ對シ相當ノ計画ヲナセル外無線電信ニ對シテモ世界一周計畫ヲ立ツツアリ	
英國ハ關ニ「帝國通商委員會」ヲ官民合同ノ下ニ設立シ無線電信ニ依リ世界一周網ヲ決定セキ其實行期ニアリ佛國ノ無線ニ依リ世界	
中略	
ルヲ得ヘレト雖信ス本委員會ヲ官民合同トナセハ我日本カ亦ニシテ英米ノ如ク世界ノ各地ニ殖民地ヲ有セザルカ爲メ對外的無線電信ノ組織計劃ヲナスニハ民間ノ私設會社ヲ利用スルニアラサレハ之ヲ實行スル事困難ナルヲ感スレハナリ	
右開諸社並也	
大正十年三月三日	
中略	
東京市小石川風小日向台町一丁目四十六番地	
日本無線電信株式會社常務取締役 加島 斌 明治三十五年七月二十六日生	
東京市京橋區銀座四丁目六番地 神戶電氣株式會社安中電機製作所専務取締役 藤田 芳季 明治廿九年十二月八日生	
東京府豊多摩郡中野町中野三三三二番地	
元海軍技術師從四位勳三等 木村駿吉 明治二十二年二月二日生	
中略	
衆議院議長 奥 繁 三 郎 殿	

図12・12 国際無線電信のための官民聯合企業立ち上げの請願書（大正10年3月2日付／木村駿吉の名も見える）

◇大正十年（一九二一年）

この年「十年式送信機」が制式された。

「十年式甲号高周波送信機（一〇〇kVA）」

「十年式乙号高周波送信機（二五kVA）」

これは、高周波発電機と三倍周波数変換器を用いた送信機だった。

はつきりはしないのだが、先に記した箕原勉の発明が基礎になっているのではないかと、考えられる。

◇大正十一年九月十五日（一九二二年）

木村駿吉はこの日付で外務省の担当者に書翰を送り、「外務省の文献翻訳の囑託を希望する」旨を述べた。

その中に、四度海外に行ったこと、自分の身分、語学への自信などが記されている。

当時の木村駿吉は日露戦争用の無電機の開発で有名であり、また社会的地位も米国博士で日本無線の重役でもあった。

そういう有名な人物から、学生がバイト先を求めるような手紙が来て、外務省担当者は困惑したであろう。木村駿吉は、人や組織との折衝では子供のようなところが有り、日本における博士号取得が理化学工学とも

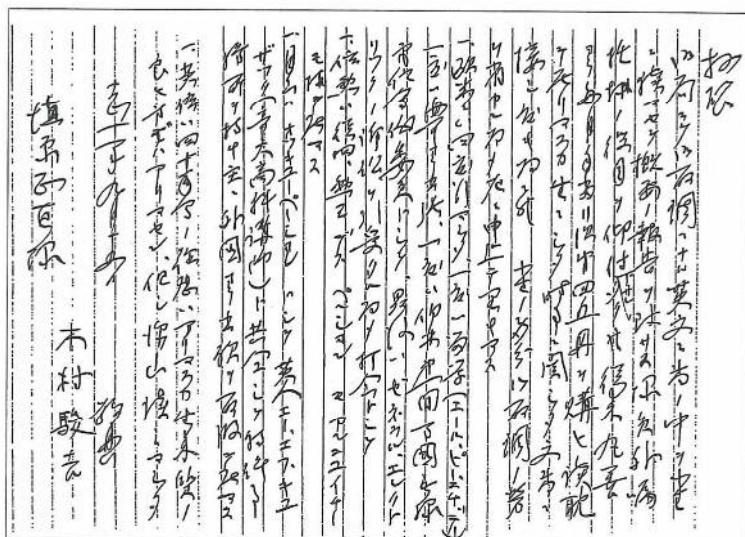


図12・13 外務省への資料翻訳申出書(大正11年9月15日付)

に失敗したのも、そういった世渡り音痴とも言える折衝下手が原因だったのであろう。

このような書翰のやり取りは、同年十一月六日まで続き、駿吉は諦めた。

書翰は五通残されているが、最初の一通を図12・13に掲示した。

◇大正十一年（一九二二年）

月日は不明だが、この年木村駿吉は、東京で南方熊楠と再会した。

留学中の駿吉がロンドンで熊楠の下宿を訪ねて以来のことで、当時を回想して大笑いしたらしい。

南方が研究所を設立するために寄付を募ったとき、駿吉は速達で百円を送金した。これは平山彦一について二人目の寄付だったので、南方は感激したと言われている。

当時の百円は現在の数十万円に相当するであろう。

◇大正十二年一月八日（一九二三年）

かつて日本海海戦の直前に木村駿吉の『世界之無線電信』に序文を書いてくれた島村速雄元帥が没した。

享年六十五。

日露戦争の初期には連合艦隊の参謀長を務め、軍人として最高の地位に上った人だが、終生謙虚さを忘れず清貧を貫いたと言われる。

◇大正十二年三月（一九二三年）

「家庭雑誌」という雑誌のこの月の号に木村駿吉は、「五人の娘を悉く他家へ嫁した私の感想」

——というエッセイを寄稿した。

（図12・14参照）

このエッセイには、子供達の結婚についての駿吉の考えや、娘たちの実名や結婚先が明確に書かれているので貴重である。

自分には娘しかいなかったが養子は取らなかった、個性（本人の希望）が重要である・・・などと述べている。

全体として感じられるのは、次男として育ったことやアメリカの雰囲気を知っているためであろうが、家を保つという発想が少ないことである。

このエッセイで分かる子供達の名と嫁ぎ先を記す。

娘の幸福が大事か家の血統が大切か

五人の娘を悉く他家へ嫁した私の感想

理學士 木村 駿 吉

木村氏は幕末の大人物であつた木村芥舟先生の血筋を承けたお方で、長く海軍省に勤められ、我が國に於ける無線電信の權威者であります。現今では特許辯理士として重きを爲してゐます。(記者附記)

子供の個性を尊重して

結婚にしても、生活に對しても、私は舊い重徳を離れて、殆んど私一流の考へ方と云つてもよい程自由な考へを持つてゐます。ですから私の考へてゐる事が、必ずしも正しき考へ方であるかどうかは自から別問題です。私は、私の性質から云つて、理性的にも感情的

にも、自由でなければ我慢がならない人間なので、すべて自分の考へのまゝに、内心の欲求するまゝに行つて來てゐます。勿論、私としても、一つの事を行ふ前には、相當に考へてもし又た反省した上で決行しますが、すべての事は私の頭で判斷して決行します。ですから私は娘の事にしても、又た娘の結婚にしても、決して傳統的なものに囚はれたくありません。現今のやうに教育が普及し、すべての人々が結婚に對しても、相當の理想を有つやうになつて來ても種々の家庭の事情から、傳統的な非個性的な結婚をする人が随分多くあるやうです。それに私に言はせると、まだ

眞の意味から結婚に對して、自覺してゐないからではないかと思ふのです。例へば自覺してゐたにしても、それは理論としての自覺であつて、まだ實際的な自覺にまで到達してゐないからだらうと思ひます。日本は大昔から非常に習慣を重んじ又た習慣を尊ぶ事を以つて一つの國民性にまでしてゐるやうな國なので、隨つてあらゆるものを行ふ場合に先づ習慣と云ふ事を考へるやうな傾向が非常にあります。私はこんな考へ程愚しき事はないと思ひます。勿論、私としてもすべての習慣を打破しろと云ふのではありません。唯その事情に依つて、却つて習慣を尊ぶ事を必要とする場合のある事を知つてゐます。けれども自分の子供達の結婚と云ふが如き重大な運命的な問題になると、從來の結婚の風習を打破する必要があると考へます。何故と云ふなら從來の結婚は、殆んど大抵が結婚するやうに

図12・14「家庭雑誌」に掲載された娘達についてのエッセイ
(大正12年3月号／娘達の実名と結婚先が書かれている)

長男…阿蒙（二十歳くらいで死去した↑既述）

次男…緝（夭折）

長女…麴子（海軍大佐に嫁す）

次女…亮子（陸軍少佐に嫁す）

三女…多賀子（海軍少佐に嫁す）

四女…千香子（大山家に嫁す）

五女…綏子（詩人で画家に嫁す）

より詳しい氏名などは、付録11を参照されたい。

全部で七人の子が生まれたが、息子は二人とも若くして死んでしまい、娘ばかり五人が残った。

妻の香芽子は養子を迎えることを希望し、とくに五女の結婚の時はそれを切望した。

しかし駿吉は生まれた孫の一人を跡継ぎにすればよい——という考えで、絵が好きな五女に適した詩人で画家を選んだ。夫となったこの人はオノヨーコの伯父に当たる。

四女については、幼い頃に許嫁になっていたので、結婚時に法律問題で苦勞した。この経験から成人する前の婚約には反対だと述べている。

駿吉自身も学生時代に養子に迎えられて苗字が代わったが元に戻るといふ苦勞をしているので、娘には自由にさせたかったのであろう。

結局木村駿吉家の跡取りは、孫にあたる三女多賀子の三男忠直を戸籍上の養子にすることで解決した。

忠直氏は比較的早くに亡くなられたようだが、その夫人の康子氏が現在の御遺族代表である。

なお前述したが忠直氏の父親の櫻井忠武氏は海軍技術のエリートで、かつ、有名な櫻井天壇（文芸評論家）や櫻井忠温（「肉弾」の作者）の弟である。

木村一族の本家については、兄の木村浩吉が長男としての責任感を持って維持していたので、家系全体としての心配はなく、駿吉はどちらかというと気楽な立場であった。

◇大正十二年四月一日（一九二三年）

築地の「海軍造兵廠」が廃止され、新たに「海軍技術研究所」が設けられた。これはワシントン会議の結果を反映した統合縮小計画の一環だったらしい。

この海軍技研は多くの有能な技術者が集められ、昭

和二十年まで活動していた。

著者の昔の上司もここで活躍していた人が多い。

◇大正十二年四月（一九二三年）

この月、日露戦争で大拡張された「海軍望楼」がとうとう完全廃止になった。

艦船に積まれる無線機の発達によつて、機能は代替され、役目を終えたのである。

見晴らしの良い景勝の地が選ばれていたので、歴史遺跡とされた望楼も多かったらしい。

◇大正十四年一月（一九二五年）

木村駿吉、「人間の内面と外面についてのエッセイ」を「報知新聞」に二日〜四日にかけて三回連載した。

◇大正十四年五月十五日（一九二五年）

この日、中野桃園の自宅で「無線タイムス」のインタビューを受けた。庭に芝生と花があったと記者が記している。

内容は図12・15に示した。

ス ム イ タ 線 無

日五十月五年四十四正大

(日三十月九年七正大)
(可動機録録三第)



無線界の開祖

木村駿吉先生を訪ふ

新緑満ちる郊外中野の桃園に之れ

丈け開いただけでも我等に如何に多くの懐かしい感を與へるであらうか。一日私はここに我輩無線界の開祖ともいふべき木村駿吉先生を訪ねてみた

先生が無線によりて活躍された一日露戦争當時は全く社會とほろも交差した特殊な仕事で従つて自分の思ふ儘に社會を指導して行動したものであつたが現今は世人の智識の向上に伴つて反つて批判される様な事となつてゐるのでも非常に六ヶ歌くなつては居るが無線の興隆として一面喜ぶべき現象である」と前提されて老

孫にでも致へられるやうに語られるのであつた「現在無線界の特許の侵害問題なども二傳へられてゐるやうであるが日本の如く模倣一點張りでは此問題を解決するには頗る困難といはなければならぬ」此等問題に於いては處で需用が多くなつたので起つたので決して偶然事ではない現在日本の狀態では起るべき事

が當然で獨り最空管に限らず日本無線機は斯界の隆盛に伴ひ需要供給が頻繁になるほど此種の問題が現はれて来るので空管に堪へない次第ではないかと先生の一語一言は凡て我輩無線界の念所を聞いて居るものである、奇麗な廣い座敷に訪ねられた西洋花からは濃郁たる香りが漂つて来る

又蘭から先生に送り出された私は迂回して庭の景色を眺めれば目も驚むるやうな新緑の中に黄緑色の山吹や紅い西洋樹の「ライラック」の花が青々とした芝生の上に點々として春の装をこしらへたる狀は丁度先生が我輩無線界にありて意欲的となつてゐるシンボルそのものやうで私に飽かずの大きな水彫畫に見惚れた

図12・15「無線タイムス」に掲載されたインタビュー記事
(大正14年5月15日号)

◇大正十四年六月（一九二五年）

この月、「海軍技術研究所」に「科学研究部」「電気研究部」「航空研究部」「造船研究部」の四つの部が置かれた。

これによって海軍の電気電子関連の研究機関が初めて独立を果たした。

◇大正十四年九月二十五日（一九二五年）

木村駿吉、「公衆衛生」という雑誌に「匂ひとその誘惑」というエッセイを掲載した。

この頃から、専門とは少し離れた軽いエッセイや意見が多く掲載されるようになる。

◇大正十四年十二月十六日（一九二五年）

「読売新聞」に「日本の男はよい婦人を得て幸福だ」という記事を執筆。

これはエール大学の同窓会でヘルムスなる男が言っていた話らしい。

◇大正十四年（一九二五年）

松代松之助の後継者として通信省で活躍していた佐

伯美津留が退官し、日本無線電信会社の技師長となった。この会社は通信業務を運営する国策企業で、木村駿吉が役員となった日本無線とは異なる。

名前が紛らわしいが、この会社の社報に「日本無線」という雑誌があり、そこに木村駿吉や松代松之助が依頼されて無線機開発時の思い出を書いている。

◇大正十五年三月（一九二六年）

この月、雑誌「太陽」に「火の洗礼」という記事を書いているが、その中で西洋宗教への厳しい批判が見られる。

木村駿吉が学生時代にキリスト教の洗礼を受け、夏季学校など熱心にキリスト教的活動をしていたのは事実である。

それが次第に薄れた理由については、本人の明確な述懐が見つからないので、何とも言えないのだが、推察はできる。

内村鑑三との軋轢、米国留学中の人種差別、日露戦役における白色人種との対決・・・こういった体験によって、次第に気持ち離れたのであろう。

木村駿吉は生前に仏教式の墓石を建てており、葬儀

◇大正十五年十二月十一日（一九二六年）

これまでの木村駿吉の著書とはまったく異質だが、『川村清雄 作品とその人物』という画家の伝記本を私家本として出版した。

川村は優れた画家で海軍にファンが多くおり、また海外でも知られていた。

はつきりとはしないのだが、木村駿吉も川村に傾倒していて、父親木村攝津守の肖像画を依頼したらしい。そのようなことから、伝記を執筆したのであろう。図12・16にその一部を示した。

◇大正十五年十二月（一九二六年）

木村駿吉、雑誌「太陽」に無線技術の将来についての記事を執筆した。

図12・17参照。

◇大正十五年（一九二六年）

この年、松代松之助は「日本電気」の取締役兼顧問となった。

無線應用の現在と未來

木村 駿吉

x

船舶の安全、乗客の安全の爲に無線電信機を取付てある船は目下一萬六千五百隻ありまして、専務として之れ等の船と通信する爲めの海岸局は千六百個處あります。此間の英國の石炭ストライキの時には、石炭を積んで行つた船を呼び戻しました。

x

無線電信のお蔭で通信料金は減じ、元は一語三十二銭の新聞通信料が一語四銭となりました。英國領地内はどこでも一語四銭（一片）と云ふこととなります。一昨年になつても大西洋を渡つた通信の三割は無線でありました。今日では海底電信との競争の爲めと、海底電信の爲に投資する巨額の資本を省く爲めに、數百の大無線局が設立されました。

x

無線と有線とを組合せて、陸上内地の普通電話機に依て航海中の船の乗客と談話することは益進歩しまして、五千五百哩と云ふ試験も成功

しました。旅行中の人はどこからでも家庭と接觸することが出来る様になります。

x

海陸遠隔の地點間の無線電話は華府からサンフランシスコまで二千五百哩、華府より巴里まで三千三百哩、ロンドンからニューヨークまで三千五百八十哩の試験は近頃成功しました。世界は益々狭く、諸民族は益々接近して來ました。

先頃マルコニ會社の技師が、英國から短波長の送信をしました時に、その電波が八遍地球上を巡回してエコーとして八度元の處に戻つて來て、うるさかつたと云ふことです。無線放送は御承知の通りの盛況で、米國には五百萬の家庭、英國には二百萬の家庭に取付られてゐます。

x

船舶や飛行機の上に向方向探知器として取付られてゐます。自分が今何と云ふ地點からどの方向に居るかと云ふのを知る器械です。二百六十隻の英國船はこの器械を据て居り、之れに方向

を知らせる地點は八十五個處あります。船舶や飛行機に方向を知らせるに止まらず、之れ等の位置を知らせる無線燈臺と云ふものも、益々多く設立されつゝあります。これは重に近海での用に立つもので、濃霧中陸地に近付いた時に安心の出来るものです。

x

濃霧中港に入つて安全に投錨させる爲に、海底に布設したケーブルに電波を送り、船は之れを受けながら安心して入港して來ます。

x

船に雷管發聲器を備へ、その音を海底より反射させ、之れを受信してその時その時の海底の深さを知ることやつて居ります。

x

佛國の提唱で、時刻と天氣豫報や氷山や遺棄船の位置を、日々數度航海中の船に送つてゐます。

x

多數の人に聞かせる爲に舞臺の上やテーブルの下にマイクローフオンを置き、音聲を増幅して高聲器から再出させますと、十萬人の聴衆に演説を聞かせることが出來ます。先頃の大統領選舉の時には、多數の放送局を利用して、大統領の演説を全國の家庭に聞かせました。

x

図12・17 雑誌『太陽』大正15年12月号に掲載された無線の未來を予見したエッセイ

十二・二

昭和初年～昭和十三年
文献紹介／思出談／
伝記の執筆／病没

◎昭和二年～九年の目録

◇昭和三年三月～五月（一九二八年）

特許関係のお役所組織から出ていた雑誌「發明」の三つの号に、「企業の従業員の發明について」という記事を連載した。

これは特許弁理士としての知識を活かしたエッセイだが、この頃の駿吉は、専門外の分野でも数多くの記事を雑誌や新聞に発表している。

調べられる範囲の発表資料を纏めたリストは付録2にあるので参考にして頂きたい。

◇昭和三年八月三十一日（一九二八年）

この日の東京朝日新聞に、「その頃を語る44」として木村駿吉の思出談「無電成功の喜びその距離實に約一丁」が掲載された（図12・18）。

その内容は格別のものではないが、添えられた写真が貴重で、浅間に開発途上の無電機を積載して明治天皇の天覧に供した時の送信機とメンバーが写されている。この時の受信機の写真は松代松之助の資料にあるので知られているが、送信機の方は珍しい。

（図6・14に揭示してある）

◇昭和三年九月～十二月（一九二八年）

この四か月にわたって木村駿吉は、TOURIST という雑誌に『川村清雄伝』を英訳して掲載した。

その一部は図12・16に示してある。

川村への強い傾倒が見られる。



おもてはる 【四十四】

無電成功の喜び

その距離實に約一丁

木村 駿吉氏

「電報を用ふ事によつて遠く
する所がマルコニーといふ大に
よつて解れた」といふ話の
外、無線の記号が無線の電報
に與へた、これは面白い事だといふ
手によつて感したものだといふ
いふは、然る考へをその
方の感激いぢりを感じたのは、だ
一語に對して問ふ時代である
然しもとく、語をつかむやうな
語で發見した事であつたが、兎
に西仕事の暇々に歸國して研究
——といふものもおこす位
なものだ——して居た、所で
矢張り私と同じやうな考へを
て研究して居たのが、今日日本電氣
の取組役をして居る松村 松之
助君で、當時は東京電氣の技師で
あつた。又わが海軍の方でも
この無線電報を軍艦上に使つ
たらうたらうといふ議なる
り外波(内藤君)少將が主として
これを唱導し、時の海軍大臣

山本權兵衛伯は非常に興味をも
つて「それは是非わが海軍で完
成させなければならぬ。費用は
懸らぬといふでもないからや
つてみる」といふことであつた
ので、外波少將が委員長となり、今
の山本義典中將それに松代侯爵
と松平などが研究を始めるやうに
なつた。そのとき外波少將は山
本義典に「研究するにはまづ一
年位はかゝると思つて下さい」と
いふので「どうして一年位で用
来るものか三年かゝつて居るに
つやうなものが出来たら大威
光」と感服してくれた。

そこで研究の

目標として八マイル以内の距離
の研究といふこととしたが、電氣
の材料も向もないそれを造る
といふ主として二ヶ月間は費
する事としてやつと一丁やりなら
受買に懸するやうになつた。その
時のうれしきは今に於けることが

出来た。早速このことを海軍大
臣に報告すると、感して見せると
いふこと、海軍大臣がやつた
こと、前々研究の懸念は持た、け
れども時マルコニーは三マイル
五マイルと懸して居るのでも何と
かして距離を縮まなければなら
ぬ、色々主として見た結果、松之
助君と義典中將とが六丁距離の
距離に成功した。これなら大威
光と、案地の間に試みた

大威といふことをは往々立てる
代り、風船をもつてしたところ、米
が初めに散々な失敗、真波山に
着て、距離する時には風船の代
り、これを用ゐるべきとする
土地の人々などが「役人とは
人々は、このやうな所に来て
たことを、遊んで居ると笑
つたものだ」と言はれる方は氣
が氣でない。ところが、総いこ
とは、いふな

◇昭和四年六月～七月（一九二九年）

この頃の木村駿吉は、手当たり次第に翻訳しているという印象がある。

この二ヶ月、「朝日」という雑誌に駿吉らしくない文章を発表した。外国雑誌からもってきたように思えるが、専門とは無関係だし、レベルが高いとは言えない。

◇昭和五年二月五日（一九三〇年）

渡米で知り合っていた弁護士の岸清一から川村清雄あてに、「木村君の病氣憂慮に堪えす候」との書簡がある。この年は重い病氣にかかっていたのであろう。

岸も川村を応援していたようである。

◇昭和六年一月、二月（一九三一年）

駿吉、「日曜報知」という雑誌に二種のエッセイを四回掲載した。海外雑誌からであろう。

◇昭和六年五月（一九三一年）

「蚯蚓流」という、句読点の無い英文についてのエッセイを「校正往来」という雑誌に投稿した。これは依頼だったのであろう。

木村駿吉はこの年「日本無線電信電話株式会社取締役」を退任した。ほぼ十五年半の勤務だったが、後半は実質はあまり無かったように思われる。

◇昭和六年七月二十九日（一九三一年）

木村駿吉はこの日付で、岸清一より送られた札状の写しに翻訳を添えて川村清雄に書簡を送った。

川村伝英訳に関するものであろう。

◇昭和七年五月（一九三二年）

木村駿吉、松村介石の雑誌「道」に対米批判のエッセイを掲載した。

松村は大学時代の知人で、たまたま電車の中で久しぶりに再会して、それが縁で「道」に投稿するようになった。

松村は独自の愛国的キリスト教で知られた思想家で、「道」はその機関誌。この五月号には駿吉を紹介する文章がある。

松村は駿吉との縁で木村攝津守とも面会しており、その時に攝津守の名刺をもらったらしい。

懷舊談

この木村先生と松村先生との関係の事は、前號に載せてある通りである。就ては、適日松村先生と間違して此の木村先生を助けた時、其時色々の御話あつたが、兎に角今日の御話の様な事を、書いて御寄稿下されと頼んで置き、送つて來られたのが、この稿である。記者

木村駿吉

すい分古いことですよ、まる四十三四年前のことだから。その後はお互に違つた道を歩んで來て、今また違つて膝を交へるのは。さうさう洛陽會と云ふのがあつた、君とか、内村鑑三君とか、大西祝君とか、植村正久君とか、豪傑のお揃ひさ。僕の家でも一回集つたことがあつた、本郷森川町の何とか云ふ下宿屋の隣さ。僕は帝大の物理科を卒業した計り、凡てが物質であると云ふ立前であつた。そこへ大西君が言ふのは、物質なんてありはしない、萬物悉くマインドだと言ふのさ。僕は面喰つたが、毎日食ふ米の飯も、毎日ひる糞も悉くマインドだと

は、い、し、て、も、吞、込、め、る、も、の、で、な、い、内、心、頗、る、不、平、で、哲、學、者、と、云、ふ、者、は、變、な、こ、と、を、言、ふ、と、思、つ、て、ゐ、た、が、四、十、年、後、の、今、日、の、物、理、學、で、は、大、分、變、つ、て、來、た、様、だ、少、な、く、と、も、今、日、見、る、處、の、原、子、(ア、ト、ム)と、云、ふ、も、は、ニ、ナ、リ、の、性、質、を、持、ち、放、射、の、性、質、を、持、ち、波、動、の、性、質、を、持、ち、今、ま、で、マ、イ、ン、ド、の、名、の、下、に、包、括、さ、れ、て、ゐ、た、性、質、を、も、持、つ、が、故、に、凡、て、が、物、質、で、あ、る、と、か、凡、て、が、マ、イ、ン、ド、で、あ、る、と、か、云、ふ、こ、と、は、無、意、義、の、た、わ、言、だ、と、云、ふ、様、に、な、つ、て、ゐ、る、の、さ、松、兄、は、喜、ぶ、と、思、ふ、が、今、日、科、學、の、先、頭、に、立、つ、人、々、の、中、に、は、漸、々、に、じ、て、人、間、の、生、活、に、因、果、律、を、信、ず、る、

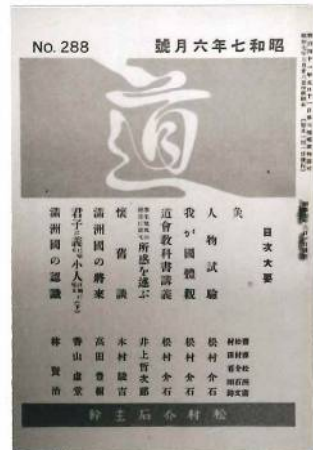


図12・19 雑誌「道」への投稿開始
これは「懷舊談」

◇昭和七年六月（一九三二年）

「道」の六月号に、駿吉は『懷舊談』を発表した。

若いころにキリスト教会に通うようになった理由や不敬事件についての思出談などがあり、貴重な資料となっている。

一部を図12・19に示した。

◇昭和七年十月（一九三二年）

かつての水雷術練習所の無電部門の後裔といえる海軍通信学校で、日露戦役時代の無線技術についての講演会がなされた。

出席は木村駿吉、松代松之助、外波内藏吉、山本英輔、清河純一などであった。

駿吉は「草創時代ノ無線電信」として講演した。日露戦争後に開発された四三式の話は他にはほとんど無いので珍しい。

山本（無電）や清河（暗号）の講演も興味深い。

全体として当時を偲ぶ話で、技術的な解説ではないが、他の人達の話も、具体性のある思出談として貴重である。

これは『通信懷舊談』としてこの月に本になってい

る（図12・20）。

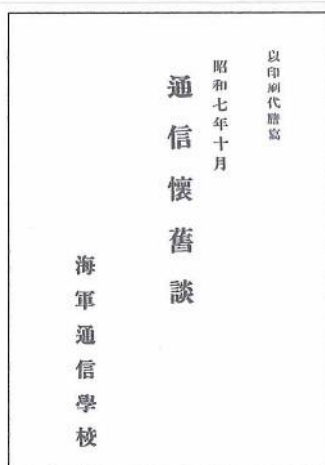


図12・20 海軍通信学校での講演記録

◇昭和七年（一九三二年）

松代松之助、この年、「日本電気」を退社した。六十五歳であった。

日本の無線技術のパイオニアとして大きな足跡を残したと言える。

なお、この頃と考えられるが、松代松之助が三六式（？）のレプリカを製作したという話が残されている。海軍通信学校長の経験があつて草創期の無電に詳しい降幡敏が後に語ったのだが、レプリカ二台を松代に

依頼し、一台を通信学校に置き、もう一台を海軍館に陳列したそうである。

著者が小学生時代に海軍館で見たのはこれだったのかも知れない。

降幡は終戦時に紛失した記念艦三笠の無電機レプリカの再製作に尽力した人である。

記念艦三笠の展示用レプリカは木村駿吉の下で働いていた人物が作った日露戦後の無電機形状だろうという話の信憑性が高いので、この話にある松代の製作は三四式だったのではないかと想像される。

◇昭和八年四月（一九三三年）

駿吉の兄の木村浩吉も文筆好きであり、引退後には文芸作品なども執筆していたが、この年、『黎明期の帝國海軍』という書物を海軍兵学校の参考書として出版した。

歴史書というよりも、歴史エピソードの思出談的な書で、海軍兵学校の生徒の気軽な読み物を想定したらしい。

それだけに逆に興味深い内容である。この本の抜萃が「道」に分載されたが、たぶん駿吉の仲介によった

のであろう。

図12・21に一部を示した。

黎明期ノ帝國海軍

一 序 言

我が大八洲ハ其ノ地位・地形・住民ノ天分、其ノ他悉ク大艦隊國タルニ選シテ居ルノデアアル。ソレヲ幸ニ卓越セル方針ノ下ニ良師ヲ迎ヘテ、其ノ優秀ナル學術・紀律ヲ傳授セラレ、海軍ノ基礎ヲ築キ、其ノ後、其ノ優越セル自助ノ特性ヲ現ハシ、學術ノ研究ト實地ノ練習トヲ積ミ、絶エズ各國ノ長ヲ探リ短ヲ補ヒ、又戦時ノ經驗ニ鑒ミ、獨創ノ方法ニ據ツテ、列強ノ追従ヲ許サナイ程ニ進セシメタルデアツタ。之ヲ樹木ニ譬ヘルト、培養効ヲ得シテ早クモ芽ヲタル大樹トナツタノデアツタ。近隣暴雷モ之ヲ如何トモスルコトガ出来ナイヤクナルデアアル。蓋シロコニ進スルニハ、先づ育英ニ全力ヲ注グヲ順序トシタルデアツタ。即チ先見ノ士ヤ基礎トナルベキ者

—

◇昭和八年五月（一九三三年）

駿吉、「いろいろのこと」というエッセイを「文藝春秋」五月号に発表。

晩年の駿吉が強い愛国心を持ち欧米よりも日本古来の伝統に傾斜していたとわかる。

図12・22に一部を示した。

図12・21 木村浩吉による
黎明期海軍の解説
(海軍兵学校参考書)

いろいろのこと

木村 駿吉

○ミルと云ふ男が言つたさうだが、人間には二種類あつて、至極満足してゐる豚チヤンであるか、左もなくば不平不満な哲人であるさうだ。乃公の如きは兩者を兼ねてゐる人間なんだ。勞働の代償として小切手が舞込て来たときには豚チヤンとなつて、世の中がステキに朗かに見える。事迄と違ふ時には哲人となつて、深遠なる思想が雲の如く湧てくる。豚チヤンと哲人の間を往復してゐる様なものだ。

○御會式のドンドコドンドコを聞いてゐると、あれには偽善がなく、良いなあと思ふ。

○うそには三通りあるさうだ。眞黒なうそ、眞赤なうそ、眞白なうそが失れてゐる。眞白なうそは言ふべき事實を言はずして、先方をして勝手に誤解せしめ置くことである。

○新聞の經濟記事に、一株に付金二十圓とあつた。此大不景氣の時節に大した配當だと思つて次を讀むと、何んだ勘込みのことさ、氣の毒なのは株主だ。

○日本のギヤングはシカゴがお手本だ、東京市の醜狀はクム・マニールがお手本だ、メリケントラストは日本財界のお手本だ、ラケツトの複製も現はれて来た、近い中には投票獲得の爲に〇〇銀行に利子を下げさせて株式を獨り立てることもやるだらう。源は西方米國より來るかな。米人曰くアイ、アム、ベリー、ソーリーだとさ。

○美人は天の成せる高級藝術品である。決して個人の事有すべきものでない、博物館に置くか寶塚か蒲田か新橋邊に置くべき物だ、昔は大名が私有してさへ御家騒動を起したり忠臣が轍腹を切つたものだ。高級藝術品の保存には費用を惜んではならぬ、美人は高價な裝飾を要求する權利を持つ、だから

図12・22 昭和8年5月号文藝春秋に掲載された憂国エッセイ

木村駿吉
皇太子殿下御降誕御祝賀として
昭和九年二月廿六日
宮城に於て賜餐の帰途撮影



図12・23 多くの資料に使われている著名肖像写真

新刊レビュー

Lord Riddell's Intimate Diary. New York, 1934.

木村 駿 吉

歐洲戦争の終、巴里の講和會議は英と米の巨劍勝負であつた、ロイド・ジョージ氏と大統領ウィルソンとの一騎打であつた。

英國の新聞社は銘々臆コキの記者を派遣したが、その上にロンドンと地方の新聞社は結束して、此日記の著者リッデル卿に代表を委託した。全權委員の首相と著者は殆んど寸時も離るゝことなく、然も相犯すことなく影の形に添ふが如く相寄り相助け、一世の英傑行政の首脳と國民批判の指導者とが、官民合致の至誠を盡くして、互に生かし生かされつゝ一章祖國の爲に進んで行く處は、單に一時の講和會議の爲めのみならず、立憲政治の妙諦此邊に存するものではあるまいか。僕は之れが馬鹿に氣になつたから、此番物のレダローを書く氣になつた。こんなことが書いてあると云ふ風にしてレビューをする。Rは著者リッデル卿の略、LGは英國首相ロイド・ジョージ氏の略、Wは米國大統領ウィルソンの略、括弧の中

は僕のよまい言。

●Wのお茶の會でこんな話が出た、巴里市の紋章は船の岡の下にラテン字句を書いたもので、それを譯すと「度々ゆれるけれ共決して沈没はせぬ」と云ふのである。成る程如何にも良く佛國々民の氣質を現はしたものだ、意見の一致を見た。時に東京市の紋章は何を徵表したのか知らん。

●LGやボナー・ロー氏などと晩餐を共にした後、世界は今日人間努力の評価仕直しを要求してゐると云ふ話が出た。

R「人民が聞質したがつてゐるのは、一人の巨富長者と云ふものは世界に取て、五千人の炭坑々夫やエンジン廻はしよりも價值があるものだらう乎、英國人臣の最高位にある大法官と云ふものは、百人の船長や小學校長や大學教授などと同じ價値のものだらう乎、と云ふのです。」
大蔵大臣のボナー・ロー氏は此見方を面白がつたが、LGは何とも言はなかつた。

●そのボナー・ロー氏が外務大臣で門閥家のカーゾン卿に向て「三百年前には私は多分あなたの莊園に働いてゐた農奴でしたらう」と云ふと、LGは「我輩は農奴ではなかつたらうが、多分席旗を押した奴隷であつたらう。」(何となく春日人皆樂しと云ふ趣きがある)

●飲酒の話が出た、R「酒のない世の中は危機を孕んだ世界ですよ、權利々々と要求して來ませうよ。飲酒せぬ世界は革命の世界です、禁酒令を布くにしても變化は凡て急激であつてはなりません。凡て改革は漆を塗る様なもので、上から上へと次第に塗り上げて行くのです。世の中はまだ強い酒を止める用意をして居りません。」

LG「その通り、酒の利害は差引勘定をして見なければ分らんよ、一方には見苦しいこと零落や刑罰があるが、一方には又一層大きな幸福と満足と樂みの豫想と興奮がある、我輩は飲酒の方を探るね。(僕も同感です)」

●LG「我輩は從來から相續税賛成者なんだ、富者の相續税は五割が相當だと思ふんだ。富者に税をかけるのは死んだ時が一番良い時機だ。何しろ金の工面をしなければ立行かんのだから、五割と云ふことには道理があるよ。」

R「それよりも米國に嚴罰の牽引きをさせ様と云ふ目論見があるんです。米國は戦

図12・24 『學士會月報』に連載された新刊レビューの最初(昭和9年4月号)

◇昭和八年十一月十七日（一九三三年）

マルコーニ夫妻が来日し、日本側は国を挙げて歓迎をし、勲一等旭日章を贈呈。マルコーニ夫妻は明治神宮に参拝した。

木村駿吉は歓迎会には出席しなかったらしい。

◇昭和九年二月二十六日（一九三四年）

木村駿吉、皇太子殿下御降誕祝賀に際して皇居に召されて、賜餐の栄。

その帰路に記念に正装で撮影。これが後にまで木村駿吉の肖像写真（図12・23）として残された。

◇昭和九年四月（一九三四年）

木村駿吉、「道」に「火燵のまはり」を寄稿。

満洲問題で日本の理とシナの宣伝上手を指摘して警告している。

またこの月から、「新刊レビュー」を「学士会月報」に発表し始め、数多くの海外書籍を紹介した。

（図12・24参照。この種のものが二二篇の他、別種のエッセイが何篇か見られる）

国際問題関連の書が多い。その中には、最近話題に

なったラルフ・タウンゼントの本が『暗黒大陸中国の真実』含めて二冊見られる。

◎昭和十年～十三年の日録

◇昭和十年一～二月（一九三五年）

木村駿吉、「道」に「一日本人の見る米國の東亜政策」を分載した。

キリスト教への強い反発が見られる。

このエッセイは海軍の「有終」に転載されたが、その時は「基督教を疑ひ始めた」という章題が付けられた。

木村駿吉の宗教意識の変化は、雑誌掲載エッセイによつてかなり明確に判明する。

◇昭和十年四月（一九三五年）

前記エッセイが「有終」に転載になった。
（図12・25）

五、基督教を疑ひ始めた

米國東亞政策の礎石に對して内外から致命的の打撃を與へたのは歐洲大戰であつた。此大戰では獨逸側も英國側も數千萬の人類が唯一の頼みとして、血涙を絞つて同一の神様に祈願したものだ。願くは味方を勝たせ玉へ敵を亡ぼし玉へと、神様は張子の人形の様に二つに割けてしまひどちらにも何等の功德も與へなかつた。平常あれ程信仰したり禮拜したりしたのも此かる時にこそ御助けを得んが爲めであつたのに。戦後には定めし敵味方とも後悔懺悔改悛贖罪の祈禱でも捧げるかと思つてゐたら、誰れも彼れも又々武裝を凝らして一層殘酷な殺人準備に汲々としてゐる。

二千年來信奉して來た基督教國の人々が擧つて聖書の神を疑ひ始めたのだ、人間が人間に象つて作り上げた神様を變だなどと思ひ始めたのだ。戦後此形勢に困惑したのは在宣教師達であつた、彼等は劣等民族視する支那人の前に立て神を稱へ聖書を講ずるのを耻る様になつた。若し支那人から我々は昔から四海兄弟の大義を奉じてゐますと云はれたら、彼等とはや其土地にゐた、まれぬであらう。夫等宣教師の大本山たる米國では此唯一の宗教が知識階級と青年

図12・25 雑誌「有終」昭和10年4月号
「一日本人の見る米國の東亞政策」より



(c)



(b)



(a)

本書は日本海軍無線電信創始者の一員たる元海軍技師木村駿吉氏が、日露戦役三十周年記念として記述せられたるものにして、当時世界第一の無線電信を完成して海戦に寄与せし所多大なりしと其の研究の苦心とを窺ふに足り、後進慣起の好資料たるべきを思ひ讀て之を一般に薦むることとせり。

昭和十年九月

海軍省教育局



日本海軍初期無線電信思出談

海軍無線電信調査委員會記事・横須賀海軍工廠造兵部無線工場記事

元海軍技師 木村 駿吉

○日露戦役の後三十年、當時お役に立つた海軍初期の無線電信に付て、自己批判を加へながら順序に拘らず回顧して見よう。

何分にも三十五年乃至四十年前からの事實を記憶から進めることであるから、年月其の他は多少臆縮とした點がないでもないが、重要な記事には誤謬のない積りである。外波、松代の兩君が夫れ／＼關係された部分を讀まれて、意見訂正を寄せられたことは、本談に千鈞の重を加へたるものとして感謝に堪へぬ。數年間苦樂を共にした三人が今尚ほ生存してゐるのはお目出度い話、敬老の順序で書いて見ると、外波君は七十三歳、私は七十歳、松代君は六十九歳でその様な老人達が相揃つて、日露戦役三十年の祝典を迎へ得たるは何たる幸福ぞ。

日本海軍初期無線電信思出談

明治三十一、二年を中心として其の前後五、六年の間には、今日至大の發展を遂げてゐるものゝ、初めて産聲を上げた基本發明が、不思議にも密集して現はれた。明治二十八、九年には伊太利人マルコニが無線電信を發明して、今日では蜘蛛絲を張渡した様な放送や、五大洲を結ぶ無線電話にまでも發達し、明治二十九年には獨逸人レントヘンがエックス光線を發明して財布の中の銅貨や鉛筆の芯を露出してゐるが、今日ではタリリデ管や軍工業への應用にまで發展し、同じく明治二十八、九年にはデッコから移住した米人ニコラ・テスラが電氣交流を發見して、ナイヤガラの水に依つて交流發電機を回轉し、初めて水力電氣を提供したが、今日では世界到る處白炭の名を以て、數十萬ボルト數百萬キロワットの交流は動力にも照明にも使用され、明治

(e)

(d)

図12・26 日本海軍初期無線電信思出談

- (a) 最も早期と思われる青写真版
- (b) 同文末の年月日
- (c) 同後文末の年月日
- (d) 海軍教育局の序
- (e) 「有終」10月号に出た最初の活字版

◇昭和十年五月五日（一九三五年）

この少し前から木村駿吉は後になつた貴重な資料『日本海軍初期無線電信思出談』を執筆していたが、この日でその執筆を終了したとの文末記事がある。

この思出談はいくつかの形で活字化された。

日露戦捷三〇周年記念を目指して執筆したのである。

（図12・26）

敵艦見ゆ 無線電信の設備者



大東海戦周年に
表彰の候補

図12・27 東京朝日
日本海海戦30周年
記念表彰のニュース

◇昭和十年五月二十五日（一九三五年）

「日露戦役三十年記念祝典」がなされ、海軍省において海軍大臣署名の感謝状と記念品を贈られた。

外波内蔵吉は病床にあつたので出席できず、駿吉が

代理で受け取った。

その時の新聞記事の一部を図12・27に示した。

◇昭和十年五月（一九三五年）

この月の雑誌「發明」に木村駿吉は前記思出談を縮めたと考えられる「三十年前海軍無線電信の回顧」を発表した。これは単なる抜粋ではなく貴重な証言も含まれている。

（図12・28にその一部を示した）

また同月、「満洲事変とスチムソン君」を「道」に発表し、満洲問題についての欧米各国の動きを痛烈に批判した。

◇昭和十年六月（一九三五年）

木村駿吉、「日露戦争当時の海軍無線電信の懷想」を雑誌「日本無線」に発表した。

この雑誌は佐伯美津留が技師長をしていた国策会社「日本無線電信株式会社」のPR雑誌である。

◇昭和十年九月（一九三五年）

前記の『日本海軍初期無線電信思出談』が海軍省教



木村駿吉 翁

三十年前海軍

無線電信の回顧

木村駿吉

● 日本が日清戦争を経て臥薪嘗膽の苦患に入り始めた頃明治廿八九年には二個の世界的大發明があつた。一は伊太利でマルコニが無線電信を創意した、一は米國でテスラがナイヤガラ瀑布を擒縦し初めて水力交流を起した。

● 倅然としてマルコニの發明に對して認識の連進を促さしめたことであらう。

● 通信技師の松代松之助君は明治三十二年頃此無線電信の研究を開始して、夫れを參觀した海軍中佐外波内蔵吉氏（後の少將）は移動する軍艦間の通信法として極めて適切なるを看取し、時の海軍大臣山本權兵衛氏（後の大將伯爵）に建言して、卒先海軍に於て之を調査せんことを傳へた、それが嘉納さるゝ處となつて海軍無線電信調査委員會の設立とな

り、松代君は先づ聘せられて委員となり、次で仙臺第二高等學校に教授（概は用ひなかつたが）を取つてゐた筆者は、海軍教授に轉任して委員となり、外波中佐は委員長として専心無線電信の調査研究に従事されることになつた。それは明治三十三年の初であつた。

● その頃噂話に依ると、マルコニに向つて發明賣却の内意を尋ねたるに、賣價は百萬磅とか百萬圓とか云ふことで、こちらは僅少なる海軍の豫算も通過せず、軍艦の建造も思ふ

様に行かず、官吏は凡て月給の十分の一を獻納すると云ふ有様、何んでその様な莫大な金額を拂い得よう、然もその無線電信なるものが、未だ海のものとも山のものとも豫想し得られず、或は大人の玩具たるに終るかも知れず。その頃また一の噂話があつた。マルコニは無線電信の發明を知るや否や、早速空中線なるものに付て諸國の特許を出願した。日本の特許局にも出願した。然るに其時の特許法は歐米の翻譯物と見へて、國際間の特許出願優先權期間は六十

● 日本が日清戦争を経て臥薪嘗膽の苦患に入り始めた頃明治廿八九年には二個の世界的大發明があつた。一は伊太利でマルコニが無線電信を創意した、一は米國でテスラがナイヤガラ瀑布を擒縦し初めて水力交流を起した。

● 倅然としてマルコニの發明に對して認識の連進を促さしめたことであらう。

● 通信技師の松代松之助君は明治三十二年頃此無線電信の研究を開始して、夫れを參觀した海軍中佐外波内蔵吉氏（後の少將）は移動する軍艦間の通信法として極めて適切なるを看取し、時の海軍大臣山本權兵衛氏（後の大將伯爵）に建言して、卒先海軍に於て之を調査せんことを傳へた、それが嘉納さるゝ處となつて海軍無線電信調査委員會の設立とな

り、松代君は先づ聘せられて委員となり、次で仙臺第二高等學校に教授（概は用ひなかつたが）を取つてゐた筆者は、海軍教授に轉任して委員となり、外波中佐は委員長として専心無線電信の調査研究に従事されることになつた。それは明治三十三年の初であつた。

● その頃噂話に依ると、マルコニに向つて發明賣却の内意を尋ねたるに、賣價は百萬磅とか百萬圓とか云ふことで、こちらは僅少なる海軍の豫算も通過せず、軍艦の建造も思ふ

様に行かず、官吏は凡て月給の十分の一を獻納すると云ふ有様、何んでその様な莫大な金額を拂い得よう、然もその無線電信なるものが、未だ海のものとも山のものとも豫想し得られず、或は大人の玩具たるに終るかも知れず。その頃また一の噂話があつた。マルコニは無線電信の發明を知るや否や、早速空中線なるものに付て諸國の特許を出願した。日本の特許局にも出願した。然るに其時の特許法は歐米の翻譯物と見へて、國際間の特許出願優先權期間は六十

図12・28 「發明」昭和10年5月号に掲載された日露戦争無電機についての貴重な証言

育局から印刷配布された。

その最初の部分と最後の部分、および追記の最後部分を図12・26のa b cに掲示した。



図12・29 晩年の三人
左から木村駿吉・外波内藏吉・松代松之助

◇昭和十年十一月（一九三五年）

『日本海軍初期無線電信思出談』が「有終」に分載された。これがこの資料の最初の活字化だった。

図12・26のd eに最初の部分を示した。

表題部分にある「・・・委員会記事」と「・・・無線工場記事」という副題が興味深い。

なおこの時期には木村駿吉と協力した外波内藏吉と松代松之助もまだ存命しており、この思出談を読んで感想を述べており、それが文末に記されている。

晩年のこの三人の功労者の写真を図12・29に示した。

◇昭和十年十二月（一九三五年）

学士学会月報に木村駿吉が「ハーバート・スペンサーの書翰とラフカディオ・ハーンの論評」という珍しいエッセイを発表した。海外文献の紹介と考えられる。

◇昭和十一年一月（一九三六年）

前記エッセイが「道」に再録された。

◇昭和十一年二月（一九三六年）

この月の「学士会月報」に有名なタウンゼントの中

學士會月報

第五七五號 昭和十一年二月二十四發行

現在の支那と支那人を語る三書

木村 駿 吉

第一 Ralph Townsend—Ways that are dark, The Truth about China. G. P. Putnam's Sons, New York, 1933.

第一の著者は米國領事として在勤し、米人のオセツカイ気分から此種別を熊手の様なもので推察はし、陰謀な陰影をけらや外持ちならぬ氣に辟易して、支那親望の叫びを上げて遠慮つた。第二の著者は英人

作麼生 支那の統一とは

— 新刊レビュー —

木村 駿 吉

Ralph Townsend: Asia Awakens. Putnam, New York, 1936.

支那の統一完成との希望は事世知らずの米國智識階級を誘引しつつ、それが世界動向の要因を附けて支那に連なりし、他國の大總統を扇動してゐた田舎大名の甘夢を徳かし、明け方々方々の真明が付かねば顔をして續々と南京に傾倒させ、百川朝宗の盛況を起してゐる。幾十年の昔から三寸木間の舌を以て兵亂を起し、強敵を仆し、同族相率ち、外夷を逐殺し、外貨を奪略し來つた支那、遠く數千里の海外に巨端を張はしてブーメランの如く手元に戻し更に角統一の線な

ものをデッサン上げた手際は、世に忘れ支那人獨特の舌の大影響と申すべき事。然るに米國には世界中の如何なる事件に關しても一言なかるべからずとするオセツカイがある。本書の著者もその一人にして、支那の政圖に憤然として憤慨し、支那の實狀を暴露して實を掲げて筆談してゐる。今まで誰れも遠慮して公に言はなかつたことを、一切合さい、いまげたのだから支那人は定し烈火の情に怒つたであらうが、別して支那在住の外人の中には愉快がつて点を置くものもあらう。本書の著者ラルフ・タウンゼント君は三年間加州に於て新聞記者を勤めて後、上海と福州で米國領事の職を取て親しく支那土下の事情に

図12・30 「学士会月報」に連載された新刊レビューの例
タウンゼントの有名な書の本邦初紹介
(右は昭和11年2月号、左は昭和12年4月号)

五十年前の懷舊

明治二十一年理學部卒業 木村 駿 吉

此間或る會合で二人の老人（一人は五十九歳一人は六十六歳）が満場の若い人達に對て、時代後れの親切な教訓を垂れて多少老婆心の押賣りめいたことをしやうとした處、二人の若者（一人は帝大物理科を二年前に卒業し一人は同醫科を三年前に卒業した）からコツビドク反駁されたのを見て、つらつら老人の悲哀と云ふものを感じ申した。

僕の如き夫れ以上の老人は爐邊で昔噺をする以外には先づ無用の人間だと思ふ。そんな事がありましたかと笑はせるのが關の山だ。

僕は十六歳の時明治十四年に、今日學士會館のある邊の大學豫備門へ姉のお古の絞りの浴衣に袴をはいて入學試験にまかり出た。試験はロビンソンの算術とスインソンの萬國史と日本外史の英漢數三科目であつた。スインソンの萬國史は米國からの舶來本で、一回（今の十圓以上）もしたものだから貧乏家庭の子弟には中々の大金であつた。どこの木屋には安いセコハンがあると聞いて、神保町の古木屋を駆け廻つたのは今と變りはない

様だ。その頃の豫備門生は大部分が田舎の貧乏士族の子弟であるか、東京では家祿を奉還した舊幕士族の子弟であつた。裕福な實業家その頃で云ふ町家の人々は、『唐様で賣家と書く三代目』と云ふ昔からの金言を守て、子弟の學問をさせ様とは思ひも寄らなかったのであつた、學問をさせれば家がつぶれると思ひ込んでゐたのだ。

豫備門に入學して父兄から貧窮願と云ふ珍妙な願書を提出すると、授業料は一切免除されて學用品は凡て貸與又は支給される。その頃の學生で豫備門の月謝がどの位であつたか知てゐるものは先づあるまい。本郷の大學に移てからは月謝は七圓であつたかと思ふ、夫れも拂つた様には思はない、貸與生となつて卒業してから一度にまとめて納めた様にも覺へてゐる、拂はないからと云つて文句もなかつた様だ。

森文部大臣の時に月謝が金拾圓に昇り、不平の聲も少しはあつた様だ。森文部大臣が刺客の爲に殺された時には、大學の學生にも嫌疑がかゝつたと云ふ馬鹿々々しい噂もあつた。

図12・31 「學士會月報」昭和11年10月号(50周年記念号)に掲載された予備門・大學入学の頃の思出

国批判書が紹介された。

翌年二月号に出た二冊めのタウンゼント本と合わせてその冒頭の部分を図12・30に示した。

タウンゼントは比較的最近にも話題になったが、この本を選んだ駿吉は先見の明があったと言えるよう。

◇昭和十一年三月（一九三六年）

駿吉、「地中海は最早英國のものならず」を「有終」に発表した。

◇昭和十一年六月（一九三六年）

駿吉、「道」に「東郷元帥と日本精神」を掲載。これはアメリカ武官の書いた珍しい東郷伝の紹介。

◇昭和十一年九月（一九三六年）

木村駿吉はこの月から翌年二月まで雑誌「道」に「科学の最前線」を三回に分けて掲載した。

この時代の駿吉の科学解説は珍しい。

(一) 生物篇

(二) 化学篇

(三) 物理學篇

◇昭和十一年十月（一九三六年）

学士学会の五十周年記念号に、駿吉は「五十年前の懷舊」を発表した。これには予備門から大学時代までの追想を語っており、きわめて貴重な第一級の資料となっている。極貧なので予備門受験には姉の浴衣を着て行ったなど、興味深い記述が多い。

図12・31に冒頭部分を示した。

◇昭和十二年三月十一日（一九三七年）

最初期無電開発のプロジェクトリーダーだった外波内藏吉が没した。駿吉が思出談を書いた時から病床にあり、回復しなかったらしい。

自身技術者のセンスの良い人物で発明家でもあったが、リーダーとしてもクセの強い開発者たちをよく纏めて、日本の無電機開発を日露戦争に間に合わせた功績は実に大きなものがあつた。

日本の無電技術史を語る上で逃すことのできない人物である。

◇昭和十二年八月五日（一九三七年）

木村駿吉、教科書の一つである「興國實業讀本第一卷」にエッセイ「無線電信」を執筆掲載した。

◇昭和十二年（一九三七年）

この年、海軍技研の講演会で昔の無電機の回路図を紙に描いて説明した。その図が伊藤庸二の戦後の解説に引用されている。

◇昭和十三年一月（一九三八年）

「学士会月報」の新刊レビュー（図12・32）は、日本

最原の著書らしいが、文末には日米開戦を予感した木村駿吉の遺言とでも言うべき文章がある。

「日本は今英米ソ佛支の五大國を相手として虚々實々の戦闘をしている。壯觀とも偉觀とも云ひ様がない。昨今は暴風雨の中心に見る靜寂さであるが、周圍には無聲の電光が煌めいてゐる。首相を始め我々同窓の友であつて、此大事に當る大官達ちの御壯健を切望する。

（昭和十三年一月十一日）

のちにハル・ノートで知られるようになったハルへの言及もある。

現下の日本と英米

——新刊レビュー——

木村 駿吉

Perry Noel—When Japan Fights

此書は僅か五六日前に新聞に廣告されて、東洋版として北風堂から出版されたものであるが、著者は歐洲戰爭以來の経歴から見ると、在日外國通信員の中でも大巨級に屬するものらしい。現に巴里ラントランジャン紙の極東通信員で、前には米國ニューヨーク・イヴニング・ポストとパブリック・レツジャーの極東局長を勤めた人である。此書は現在の日支事態に關する最初の纏つた著述と思ふのであるが、序文の日付は昭和十二年十一月二十六日であるから、未だ南京陥落には

知れ渡つてゐるが、日本政府がそれをどの様に理解してゐるのか、ホワイ・トハウスとダウニング街に對する日本の政策とか、日本國民の英米國民に對する感情とか云ふものは、容易に把握し難いのである。
○日米間の親交は移民禁止以前、また米國の左翼が反ファッショ感情を煽動した以前の米伊間の親交に似てゐる。米國生れの第二世日本人（彼等は勿論米人ではあるが）は兩國親戚關係の因子となつてゐる。
日本でモダーン西洋風と云へば米國がお手本になつて居り、日本語の中に沁り込んだ英語は米國風の發音であつて、普通實に悪い發音である。

図12・32 「学士会月報」
昭和13年1月号
（日米開戦を予感した
遺言とも言える文章）

げ、愛国心に溢れた記述をしている。

◇昭和十三年七月十一日（一九三八年）

無線雑誌「ラヂオの日本」に、七月から没後の十一月まで、『日本海軍初期無線電信思出談』を五回にわたって連載した。

これには関係者のいくつかの参考になるコメントが有って、この著名思出談のもっとも詳しい掲載になっている。

◇昭和十三年八月（一九三八年）

この月の新刊レビューの中で駿吉は自分の雅号を「穀粒子（こくつぶし）」と称して洒落ている。

◇昭和十三年八月（一九三八年）

「ラヂオの日本」のこの年の八月号に、「無線界名士訪問記 日本の無線電信生みの親 木村駿吉氏の巻」として、自宅でのインタビュー記事が掲載された。

この掲載に関連して、編集記者との間でちよつとした悶着があり、それが駿吉の性格をよく表している。

◇昭和十三年九月（一九三八年）

先の記事の中に取材記者が「物真似説を唱えるドイツ人を木村駿吉が一喝した」という意味の文章を書いた。

それを読んだ駿吉は、「一喝ではなく理屈をきちんと述べて反論したのだ」という異論を記した書簡を「ラヂオの日本」に投稿し、それが掲載された。

いかにも駿吉らしい生真面目な異論だが、日本人の威勢の良さを強調したい記者は、あまり納得しなかったらしい。

駿吉はその他にも、外国の真似ではないと記している。

この書簡は軽井沢千ヶ瀧の別荘で七月三十日に記したとされている。

公刊された文章としては、これが絶筆であろう。

この最晩年のインタビュー記事と異論を、図12・34に示した。

◇昭和十三年十月四日（一九三八年）

この日木村駿吉は別荘で胃潰瘍で倒れ、ただちに帰京した。これが死因となった。

無線界

名士訪問記

日本の無線電信生みの親

木村 駿 吉氏の巻

擇一、枚張り観音開きの玄關の戸をくづつて十疊あまり二部屋續きの客間に入る。舊い調度と新しい調度の程良く並んで居る中に座す木村老人の雙眸は年比してはるかに若々しく輝いてゐる。久闊を除した後、さつそく記者は觸氣に記憶にあつた日露戦争直後の老人の武勇傳のうかゞひを立てた。

「マルコニが無線通信を發明して間もなく、獨逸のストラビー（アルコー伯と共に現在のテレフンケン會社を作つた人）が同様に無線通信の完成を報じた。處が英國の新聞ではストラビーがマルコニの眞似をしたのだと書きたつたものだ。その腹藏せでもあるまいが次の様なことが起つたのである。日露戦争に於て日本海軍の無線通信が偉大な功績を建てたと新聞に報ぜられた。處が獨逸の新聞ではそれはストラビー一派の研究の眞似をしたのだと騒いだのである。併し

自分のかつて獨逸に於て見た仕事と云ふのは——研究者は誰であつたか忘れて了つたが——セレンイウムセルに光を送つて通信する光通信であつて、實用にはおそらく濃の薄いものだつた。軍艦の檣の上にセレンイウムセルを置いた處で、動搖で役になど



立つ筈はない。而もセルも極めて幼稚なものだ。そこで自分は日本の新聞にかいたのである。獨逸の連中のやる様な子供のいたずら（Kittchen Spiel）を眼中に置けるか？」と。其の後明治四十二年（記者失念）かに伯

林に於て第二回萬國無線學術會議が開かれて、自分は日本から代表としてそれに出席した。處に獨逸の新聞に出鱈目をかいた男が宿に來て何か云つて居る。子供の悪戯（Mischief, Trickery）と云ふ言葉が度々出る。どうも「子供の悪戯とはひどいぢやないか」と云つて居る様な氣がして居る内にその男は歸つて了つた。そして此の話はそれで終つて了つたのだ。記者の仄聞する處は更に面白い。木村老人の書かれた日本の新聞記事は「苟くも無線の大權威木村に對して甚だ無禮なる言葉なり。下り居らう！」と大喝を發したといふのである。本誌所載の老人の思ひ出談と對照して、さもありなんと朗かな微笑を禁じ得ない。幾千幾百を以て算する現在の日本の研究者に之だけの氣概をする若人が何人居らうか。此の一事を後人に傳へるだけでも本日（老人訪問の意義は十二分にあるのだと記者の責任感には甚だ満足なものである。それにしても此の木村老人の氣概には仍つて来る處があり、而もその源が甚だ深い。

老人の座られた後ろの床には股引

羽織丁髷姿の古い寫眞の大きな引伸ばしがある。此の寫眞こそは老人の口から「下り居らう」との一言がわざとらしくなく迷り出る源泉なのだ。木村芥舟。今から八十年前の一八六〇年幕府が遣米使節を派遣する時、日本にも海軍ありと武威をはるる海外に宣揚する爲に遣米日本海軍司令官として全艦隊（但し一隻らし）を指揮して行つた時の軍艦奉行木村勘津守こそ此の寫眞の主、老人の御親父なのだ。その時の軍艦威臨九鯉長は勝海舟。福澤諭吉先生は攝津守の從僕として乗り込んだと云ふ。併し老人は此の話になつて特に註釋を加へた。福澤さんと父とは一面識もなかつたのであつたが、威臨丸遣米の事が定まつた時、突然面會を求められ渡米の希望を述べられた。他に方法がなかつたので從僕といふ事にして連れ行つたのださうである。かくる先覺の父を持たれた木村先生なのである。

老人には御話しの種はいくらでもある。記憶力は壯者を凌いで甚だたしかで、往時を手に取る様に話される。「日露戦争の終りに米國のシムスが無線操縦の水雷（第五三頁へ讀く）

ホラーセクション

四九

図12・34 a の続き

(第四九頁より續く) を發明し、日本の海軍が之を買った。之を自分が試験せしめられたが、略一ヶ年半もかゝつたのである。勿論普通のモリス符號で航や速度を調節するので。横須賀の東山の上から送信して水雷を見る。コヒラーとリレーの組合せなので、海の静かな日は相當にうましく行くが、少し風があるとコヒラーの粉が片寄つたり水雷が見えなくなつたり、なか／＼にうましく行かなかつた。今の技術では眞空管

を用ゐるので樂だらう。併し遠くへ走つたのを何處迄も目を放さないで見守り得るかどうか實用上の重點にならう。」
「その當時は何をしても面白かつた。どれも／＼皆新しかつたのだから。」
老人の目は快い追想に輝いて居る。さもありなん。かゝる思ひ出を有する者は眞に幸福である。
「日露戦争の後、獨逸のツェンネツク教授を日本海軍に於て傭ふ可き事を海軍大臣に申出た。併し勿論眞面目に考へられずに了つた。ドワフオレから自分に手紙を寄越して日本に傭つて呉れと申出た。之は彼が三極眞空管を發明する前の事であつた。之も海軍省に持ち出したが前と同様否決された。」
何事も吾等後輩にとつては新しい而も同つておく可き事許りである。記者がかさきにラヂオの日本の爲に執筆を乞ふた時にモルガンお雪が明治のはやり歌を歌ひながら祇園に待つの構想にまでなつて老人の出る幕にあらずと辞退された事を思ひ出しつつも、後人の爲にかつて歩まれた貴い経験の數々を記録に止め置かるゝ様切に御願して老人の邸を出たのは夜九時半過ぎ。思へば今日の訪問は老人にとつては夜中の來客、己れには夕食をも取る暇なかりし訪問、腹は減つても土産の神腹に意氣揚々家路へついたのであつた。

図12・34 b
「ラヂオの日本」
昭和13年9月号の反論

名士訪問記に對する木村駿吉氏の訂正と記者の辯

信越線千瀬の夏の別荘から訪問子に對して木村駿吉先生は、次掲の書簡を送られた。記者執筆中の仄間に對する訂正である。三十年、四十年の前の日に、力一杯奮戦力闘された諸先輩にとつては當時の事はあまりに「當り前の事」であり、不思議ではなかつたに違ひない。併し「別に後人に語り傳へる程の事でもない」と考へられて居る事が、意外にも後人には「何ふ可き事」、「爲になる事」、「面白い事」であり得るのである。木村先生の「仄間に對する御

訂正」は當時を如實に物語つて、正に吾人の何ふ可き事を示して下されて居る。日本無線の通信の發達史上に止めておかる可き學術研究史の一つとして、誠に貴重なものなのである。記者は先生に對する不遜の罪はのがれ得ないのを覺悟して、先生の御申出でもかゝらず、先生の執筆仄間の記事を取消することを敢てしない。而して茲に先生の御筆を本誌に掲載させて貰ひ、更に正しい歴史を讀者に御照會する。故は三十年前の先生の御執筆が當時の日本青年學徒の意氣を中外に高く宣揚し、從つて多少の言葉の云ひ廻しこそ違へ、記者執筆の様な氣持を當時の若人からである。只先生の靜かなる可き信越の御清居を御禮がせした罪を深く／＼御詫して擲筆する。訪問記者 木村駿吉氏より訂正の手紙
拜啓ラヂオの日本八月號御送り被下御禮申上候然し第四九頁の「仄間」を見て驚き申候夫故その時の顛末を記憶の儘申上候。
明治三十六年外波君と歐米觀察の時、伯林にて私設研究所を持居る忘命の技術者Aより招かれてその研究所を視察候に、セレニウムセルと普

通光線を用ゐる鐵路上に走る汽車と通信する室内試験にて、小生は内心皆用に適せざるものと鑑定致候。

其後日露戰役を終り明治三十九年伯林に開催する第二回無線會議へ委員として出張を命ぜられ、その送別會に列席し居る處へ、報知新聞社の舊友記者にしてその後同社の元老株となられたる生駒兼藏君とわざ／＼小生の行先を擧げて尋ね來られ、只今歐洲より電報あり新聞通信として明日の紙上に掲載する筈なるが、伯林の某技術者Aが日露戰役に使用したる無線機は自分の發明したるものを木村某が持返り盗用して好成績を挙げたるものと言ふてゐる。何か然るべき客辨なかるべからずとの事でありし。翌日横須賀造船兵部の工場にて文章を作り、Aの研究は「見識に類す」との語を用ゐ、最後に「余は近日を以て伯林に行く」と附加へたるものにて、此のガリ版の答辨書を全國主要の新聞社に送らるるに先後を問はず盡く掲載し呉れたるが、その寫は一葉も保存致さず候。其後東京に來りし節、神田乃武先生の御宅を訪問せしに、先日の客辨は頗る愉快に讀みたりと申され、あの濃厚にして時事に淡白なる先生にも然く感じ

たるかと内心得々と致し申候。

思ふに其の當時は世界の強大國露西亞に對し海に陸に古今の大捷を博したりとの満身の喜悅に依て、新聞記者と云はず一私人と云はず、全國民は得意の絶頂にありたる際、全國民の誇りと致したる海軍無線が盗物なりと言はれて誰も彼も口惜く感ぜ、又海軍無線が實際外國品の盗用に非ずやと竊かに心配し呉れたるも可有之、そこへ小生の威勢の良き胸のすだる如き客辨が發表されたることゝ皆々が安心も致し喜びも致したるかと存申候。今より御祭しは六づかしくと存居候其當時の日本全國民の得意の狀態は夢の如く、戦後一年間と云ふものは全國毎日お祭り騒ぎにて、歸朝せる小村大使を襲撃して身を以て逃れしめたる程の勢。小生もそれに浮かされたものか、つい「仄聞」の様な感じを持たせたる文章を書き、一時の快を貢りしかと今更慚愧の至に候。伯林に行てからAの友人なるもの下宿に尋ね來り、滔々と獨逸人の獨逸語を使い三十分ものべつに喋り通り通したるが、唯さへ喧嘩の如き獨逸言葉、小生の僅かの語學の力にてはとても追從出來ず、唯無言にて聞居る計りに

て何を申されたるか少しも解し得ず、唯何十回もキンダースピールなる聲を聞きたるのみに候。

スラビー博士の件は第二回國際無線會議中にて、同人も委員、同じく委員たる公使館付海軍武官八代六郎大佐に向て、てんで始めから日本が同人の無線機を盗用したるものと獨斷してかゝり、宴會雜踏の最中「戰爭中はこの何を盗用しても差支ありませんよ」との託宣、丸で話にもならず、然も公けに誣告したるに非ざれば其儘放擲致し置候、戦後五月にして降伏露艦より押收したるものゝ中に始めてスラビー博士御自慢の印字受信機を拜見仕候。敬具

昭和十三年七月卅日千瀬にて

木村 駿吉

訪問記者宛

編輯 同人 日誌

◇ 名士訪問子が木村駿吉氏の門を叩いたのは七月十七日の夜、編輯締切りの日に追はれて訪問子は敢て同氏の御目通しを受けることなし載録した。處が間もなく同文中の仄聞に對する嚴格な訂正が同氏から提出さ

れた。内容は仄聞であるが責任なしとする處ではない。それで同氏の訂正を本誌に載せさせて頂く事にした。併し仄聞はあくまで仄聞である。而して仄聞亦大きな意味では正しい事があり得る。況や當時の一般人士に與へた印象に於ては御當人の御判斷より以上のものを此の中に見出し得るかも知れない。そこで編輯子は同訂正に附書を附し以つて訪問子の仄聞記載の氣持を明らかにさせて頂いた次第である。(Y-I生)

◇昭和十三年十月六日（一九三八年）

木村駿吉は、軽井沢の別荘から中野桃園の自宅に帰つてすぐのこの日の早朝五時四十分（曹洞宗）に永眠した。

告別式は自宅で八日の一時〜二時に、仏式（曹洞宗）でなされた。

享年七十一（満七十二歳になる直前）。

駿吉は事前に多摩霊園に自身の墓石を建立していたので、そこに土葬で葬られた。

木村駿吉とキリスト教の関係は何度か記したが、執筆記事を読むと、日露戦争後はすっかり離れていたと推察できる。

没後の葬儀も墓石も仏式であることから、この事が分かる。

夫人も元々はキリスト教的な家庭で育った筈だが、この頃には日本の伝統的な生活に馴染んでいたであろう。

◇昭和十三年十月七日（一九三八年）

この日の東京朝日新聞に、遺族七名の連記で死亡広告が出された。広告の日付は六日で喪主は木村忠直＊、仏式であることが明記されている。

父從四位勳三等木村駿吉儀
先月四日午時於東京養老院
處に罹り爾來歸京療養中の
四十分卒去致候に付御通知
に代へ謹告仕候
追て来る八日午後一時より二時迄
自宅に於て佛式により告別式執行
可仕候 尚故人の遺志により御供
物の儀は拜辭申上候
昭和十三年十月六日
東京市中野區中野四丁目
妻 木村 忠直
女 香芽子
同 大井 亮子
同 大井 賀子
同 大井 千子
同 大井 山子
同 大井 税子

図12・35 昭和13年10月7日付東京朝日新聞
木村駿吉死亡広告

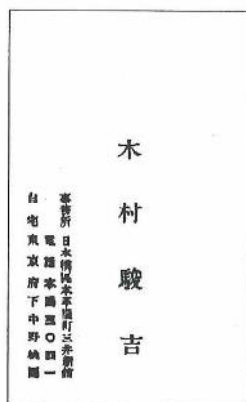
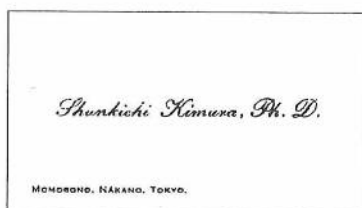
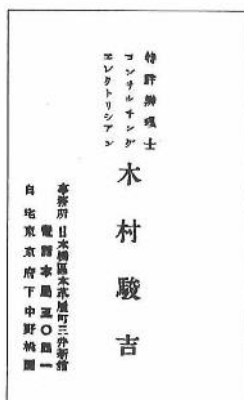
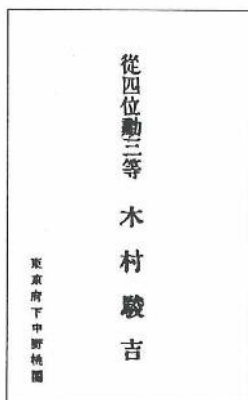


図12・36
後半生に使われた名刺

(図12・35参照。また駿吉が使用していた名刺を図12・36に、晩年の夫妻の写真を図12・37に示しておく)
*…前述したが、木村忠直は三女多賀子と櫻井忠武(海軍機関中将)の三男で、木村駿吉はこの孫を養子にしていた。



図12・37 晩年の駿吉夫妻

◇昭和十三年十一月(一九三八年)

「学士会月報」十一月の号に司城正木が木村駿吉への哀悼文を掲載した。十月二十三日執筆。司城は農業電化の研究などをしていた工学士。

(図12・38(a)参照)

松村介石が「道」十一月の号に、追悼文を書いた。松村は若い頃からキリスト教の関係で駿吉を知っており、その関係で木村攝津守の知遇も得ていた。駿吉夫人も娘時代から知っていたらしい。

晩年になって駿吉と再会してから執筆依頼した話などもあり、興味深い内容である。

◇昭和十三年十一月(一九三八年)

木村駿吉が生前に「学士会月報」に書いていた『太平洋の日本人』が、海軍の雑誌「有終」に転載された。追悼の意味を込めた転載である。

◇昭和十三年十二月(一九三八年)

この月の「学士会月報」に、親戚にあたる金原信泰(附録11家系図参照)が、前月の司城氏の追悼文への香芽子夫人の謝辞を紹介した。

(図12・38(b)参照)

没直後のいろいろな追悼文や顕彰の掲載は他にも多く有る。

理學士木村駿吉君の逝去を悼みて

司 城 正 木

學士會月報第六〇七號目次(本年十月號)を觀て居ると、本會記事欄中にヒヨツコリと木村駿吉先輩逝去の一項目を發見した。「驚愕」といふ文字通りのショックを覚え、天を仰いて慨然之を久うした。早速六十一頁を繰いて見ると十月六日七十三歳の高齡を以て天界に靈化なされた相だ。唯單に學士會月報記事の「海外新刊紹介」てふ錦上の添花を失つた「さみしさ」のみならず日露戰役の「對島沖の此一戰を」遑早く豫報した信濃丸の「敵艦見ゆ」との無線電信の劃期的通信の「様の下の力持」に大功ありし科學的戰士「を永久に最早帝都の街頭から見失ふに至つた「さみしさ」一種飄々宇たる、恰も、一掌に掉して西來した遠藤大師の風半に參歸たる、日本人離れした慈顔溫容に接する機會がヴァニツシュした「さみしさ」一度口を開けば玲瓏玉の如き聲喉に接することを得なくなつて仕舞つた「さみしさ」が衷心からこみ上げて來て、思はず眼頭に痛惜の涙を催すを覺えました。木村さん、木村さんと愛稱で呼ばして下さい。

あなた、到頭、後輩を、僕等をおいてけぼりにして「かくれんぼ」をなされましたね！今後永久に探し當てることの出来ない、天爲の「隠れん坊」後學たる僕等はさみしいです。若し世俗に可能と信じられて居る靈界通信が事實として可能ならば、どうか、學士會月報誌上に「天界新刊紹介」を毎號投書して下さい、俟つて居ますと、心腹にのみ觀得べき「御袖」にすがつて頼み入ります。僕等は實に「さみしい」です。學士會月報を毎號手にする毎に繰返へさるべき此の「さみしさ」はどうして、補填されませう。第二の木村さんが生れかへつて來て我學士會月報に、日々新日又新たな海外海内の新刊紹介が鋭利なる鑑識、靈犀なる批評眼、雄勁にして而かも亦磊々たる筆鋒と文致とを再生して讀者たちを、取残れされた後輩一同を魅了して下さい「よすが」もがたと只管御願ひ致します。此の突然の訃に接した我等學士會員は、其痛惜の情を新にすると共に、學士會當局が特に花輪香宴を靈前に呈され、感謝の誠意と哀悼の心

情を表明された美舉に對しては、是れ亦讀者を代表されての弔意の表徴として、本會當局の御心遣に、又感謝を表したい。原宿三丁目なる東郷神社建設地地の比隣なる既設「海軍館」に先賢木村駿吉さんの、日露乾坤一擲の勝負、皇國の興廢此一戰に在ると獅子吼された、彼の東郷軍神の2倍の一撃を科學的に豫定された業績が、文獻となり、掛軸物となつて陳列されてある現在及將來に於て後進日本の科學の學徒を感奮興起せしめるであらうことが、切てももの木村さんに對する「親しみ」と「感謝」とを此の世に留むる、文天祥正氣歌の「留取丹心垂汗青」の現實化である。木村さん、どうか物靜に、とはに平安な眠りを御眠り下さい。多士濟々として我海軍に於ては故人の業跡をあとづけつゝ、更に／＼清新潑刺たるラヂオ科學が躍進して居ます相です。御安心下さい。學士會月報誌上でも、必ずや及ばずながら、新刊レビューの後繼きが簇出するでせう。御精進下さつて永眠の溫床に瞑目して下さい。後生の一人として、茲に月報誌隅の一端を藉りて、満腔の愛惜の情を表明致します。

木村さん、さようなら。
昭和十三年十月二十三日拂曉盥漱沐浴して認之。

図12・38(a) 學士會月報昭和13年11月号に掲載された弔辞

木村駿吉君御遺族よりの御來狀

金 原 信 泰

先頃多數會員の愛惜の裡に故人となられた木村駿吉君の御遺族の方より學士會及故人の追悼文を前號の本誌に書かれた司城正木君に對し一言感謝の言葉を誌上に於て申述べたいとの切なる御申出があり同時に其文を送られましたので併せて辱知會員各位にもお目にかけたく此れを其儘茲に御披露致したいと思ひます。

司城正木様の御追悼文に

感謝して

木村 香 芽 子

私は木村駿吉の妻でございます。前月の

學士會月報に司城正木様がお書き下さいました亡き主人への御眞情溢る御哀悼文を拜見いたし、思はず嬉し涙に咽びました。私は司城様を存じ上げませぬが、主人の突然の訃をかくまで深く御愛惜下さいます御情誼の厚さに、たとえ感謝のほかはなく、せめてこの紙上で一言御禮をいはせていたゞきたい感動を、とゞめ得ないのでございませう。さながら生ける人にもいふやうに限りなき親しみをこめてお書き下さつたお言葉のかずく、地下の主人もどんなにか嬉しくおなつかしく伺つたこととございませう。洵にありがたうございませう。主人に代つて厚く御禮申し上げます。主人御愛顧下さいました「海外新刊紹介」は、生前主人がこよなく楽しんで執筆してゐた

ものでございます。いつも新刊書を流つては暇にまかせて讀み耽り、やがて興湧くがまゝに筆を走らせて書きましたものが、幸ひに皆様のお目にとまりましたのは主人にとつて何よりの喜びでございました。未知の方々から感謝のお手紙やおほめのお言葉を頂戴したり、意外に澤山の方々が興味と期待を持つて、御愛顧下さるのを知ることになり、主人はどれほど力づけられ慰められて居りましたこととせう。まづたく學士會月報に「海外新刊紹介」を書くことは、晩年の主人にとつて唯一の張合のある仕事であり、かつまた氣力を失はぬ若返り法でもございしました。主人が最後まで元氣で居りましたのは偏に御愛顧下さいました皆様の御聲援のおかげと、改めて感謝いたしたいのでございます。

主人の書齋には今なほ讀みさしの新刊書が澤山ございます。もし會員の方々の中で御自身お讀みになりたいたと思召す方がございましたら、いつでもお出で下さいまして何なりとお持ち下さいませ。空しく書架の塵に埋めておきますより、さうして何かのお役に立てました方が、主人も満足いたすことと存じます。なほ最後に學士會御當局から主人の靈前に御美事な花環と御香奠をお供へ下さいましたことを、厚く御禮申し上げます。これは「海外新刊紹介」の御寄稿に對する特別のお計らひのやうに承りますので、この機会に會員の皆様方に生前の御厚誼と併せて感謝いたす次第でございます。

図12・38(b) 學士會月報昭和13年12月号に掲載された夫人の礼狀



図12・39 木村駿吉家の墓石
左は夫婦名を刻んだ背面



図12・40 木村芥舟浩吉ら本家の墓石
左は代々人名を刻んだ石碑

この節の終わりに、墓石を示しておく。

図12・39は、多摩霊園における木村駿吉の墓石である。墓石背面には夫妻名が刻まれているので、その写真も示した。

図12・40は、木村攝津守や木村浩吉が眠る東京青山霊園の墓石である。背面の写真も示した。

十二・三

昭和十四年～平成二十二年 没後の研究資料

◎昭和十四年以後の記録

◇昭和十五年一月十四日（一九四〇年）

駿吉の兄、木村浩吉がこの日没した。七十九歳だった。当時としてはかなりの長命である。

前掲写真のように、父攝津守と一緒に東京青山霊園に眠っている。

浩吉は長男なので、攝津守の遺品を相続していたが、晩年にその多くを「横浜開港資料館」に寄付したと言われている。

◇昭和十七年十二月（一九四二年）

木村駿吉の伴侶として奮闘した木村香芽子未亡人が、「無電の父を語る」と題するインタビュー記事を雑誌「日本母性」に発表した。

この中で夫人は、日露戦勝後のムーア元帥歓迎饗宴に夫とともに招かれたがそれは異例のことで、その席で駿吉は東郷平八郎に挨拶したと述べている。

◇昭和十八年一月（一九四三年）

香芽子未亡人が前掲記事の続きとして同じ雑誌に「結婚生活の回想」と題するインタビュー記事を發表した。

これは前述もしたが、若い頃の苦労の生々しい表現があり、内村鑑三への反発なども記されていて興味深い。

◇昭和二十年（一九四五年）

木村駿吉の「日本海軍初期無線電信思出談」が「科学史研究No.9」に復刻された。

初期資料ではないが、この資料に基づいて論じている研究者が多い。

◇昭和二十三年四月二十三日（一九四八年）

最初期の無電開発で活躍した松代松之助が没した。
享年八十一であった。

◇昭和二十六年七月十三日（一九五一年）

木村香芽子未亡人が没した。
享年八十で、当時としては長命であった。

◇昭和三十六年五月二十日（一九六一年）

横須賀の記念艦三笠は、戦後のロシア兵による乱暴や盗難や商業施設化などで荒廃し、見る影も無くなっていたが、有志の人達の熱心な努力によって、ようやく復元工事が終了した。

工事費は当時の金額で一億八千万円とされている。

この時、創立時からあった無電機のレブリカも復元された。写真を比較すると形状はほぼ同じで、回路的にも同一である。

（ただしこのレブリカは、初期のものも復元も、日露戦争時の実際の無電機とは形状・電気回路図ともに異なっていることは、前述した）

復元完成の式典は二十七日に義宮殿下御臨席のもとに開催された。また翌月には皇太子殿下（現天皇）もご来艦なさった。

◇昭和四十年十月（一九六五年）

木村駿吉の「日本海軍初期無線電信思出談」が、日本無線株式会社の社報の記念版として印刷配布された。日本無線は木村駿吉が創業者の一人となった会社で、戦災をのがれて資料が保存されていたので、日本海海戦戦捷六〇年記念として復刻したらしい。

◇平成三年七月二十五日（一九九一年）

「日本海軍初期無線電信思出談」の抄録が、書籍「幕末・明治初期数学者群像」に掲載された。

◎関連書籍紹介

木村駿吉に関連する文献は多数あり、付録1～3に掲載してあるが、あまり知られていないが興味深い

くつかの資料を示しておこう。



図12・41 伊藤庸二「日本無線電信史」掲載誌
(昭和24年10月号～昭和27年4月号)

◇伊藤庸二『日本無線電信史』

雑誌「むせん」の昭和24年10月号～昭和27年
4月号に連載(図12・41)

伊藤庸二は大東亜戦争時の海軍無線技術の中心人物



図12・42 「日本無線史全13巻」
(昭和25年12月～昭和26年9月)

で、戦後は光電製作所を設立して活躍したが、技術の歴史にも関心が深く、木村駿吉の講演を聴いた経験もあって、終戦直後の時代に貴重な記録を残した。また終戦時には、日本海軍の無線開発の大量の記録を郷里の寺に秘匿保管したとされている。

一、信濃丸敵艦隊発見の回顧

三一、小森吉助

今より五十年前日本国の運命を賭したる日本海々戦で、最初に敵の大艦隊を発見して之を全軍に警報したのは信濃丸でありました。当時の成川艦長以下乗組士官の大部分はとうに物故せられ、生存者は僅に三人となりましたので私（当時少尉）が代て敵発見前後の状況を御話申し上げます。明治三十七年日露開戦以来満洲方面に於ける露国陸海軍の敗戦次ぎ次ぎと露西亞本國に伝えられたので、露國民は大に驚き国内各地で政府に対する不平爆発し、遂に叛乱さえ起すに至りました。三十八年三月十日陸戦に於て露の大敗となった以上露國は本國より「バルチック」艦隊を東洋に送って日本海軍を撃破し、我満洲軍の糧道を絶て戦勢の頹敗を挽回しなければならぬと廟議一決したのであります。之より先露國第二艦隊は東洋に向け本國を発航し、三十八年一月上旬亞弗利加東岸「マダガスカル」に投錨しましたが、其の後一向動かないので其の行動如何

は世界の注目する所となりました。然るに露國政府が前述の如く決意したので、露第二艦隊は遂に三月十六日同地を出港し四月七日朝果然「マラッカ」海峡に顯われ、支那海に進入し十四日全艦隊悉なく仏領安南の「カムラン」灣に投錨した。之で敵は健氣にも我海軍と一戦の決心で北上するものなることを判断し得たのであった。之より先き我海軍は、敵を日本近海に迎えて一挙に之を撃破する作戦を定められたのであります。が、敵を迎うる玄海灘は波荒く駆逐艦や小さな軍艦では連日荒波と戦って哨戒勤務に服することは甚だ困難でありますので、当時日本で最大級の商船信濃丸（総屯載六千三百八十七屯、排水量一万余屯で歐洲航路の一流客船）、佐渡丸、亜米利加丸等を徴発し之を武装して仮装巡洋艦に仕立て（武装商船とは別）、之を最前線の哨戒機として配置することになったのであります。私は三月十五日信濃丸乗組を命ぜられ、旅順方

図12・43 「信濃丸」の小森吉助(当時少尉)の思出談
(五十周年記念海軍電波追憶集第1号より)

歴史に名高いかの日本海海戦において、勝敗の帰趨を決した敵艦大回頭を命令したのは、だれだったか？

敵艦見ユ 広瀬 正

「所長」とカトウがいった。「あまり頭を出すと、あぶないですよ」

オハラ所長は、ふとった体をモゾモゾと動かし、少し姿勢を低くした。「いや、まったく、ここへ来てよかった」つぶやくと、彼はふたたび、またたきもせず、前方を見つめはじめた。

橋と艦突をバックにした艦橋は、さして広くない。いまでも、そ

こへ幕僚たちの姿が揃いつつあった。彼等の制服の濃紺色が、中央の羅針盤の周囲その他に並べられた真白な釣床と、きわだったコントラストをせしめ、目にあさやかである。

「まるで、あの……」

カトウがいかけるのへ、オハラは、「しっ」と制した。「大声を出すと、感づかれるぞ」

「ええ、まるで」カトウは声をひそめて、言葉をくり返した。「あ

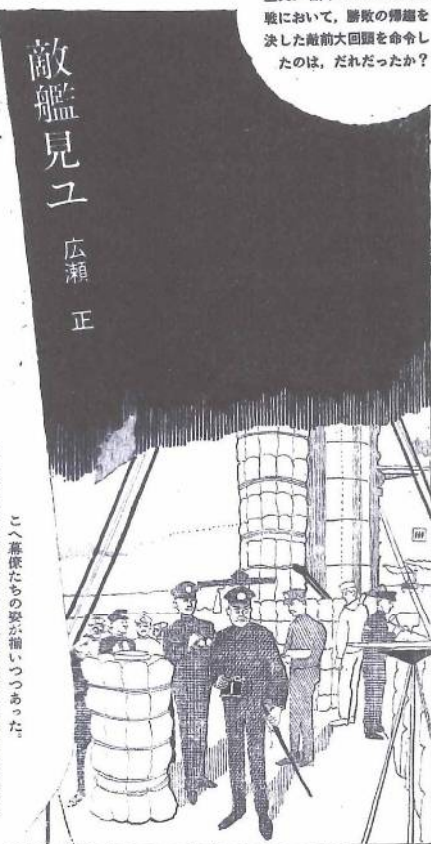


図12・44 日本海海戦を描いたSF小説
誰が大回頭を命じたのかがテーマ
(「SFマガジン」昭和39年6月号)

◇電波監理委員会『日本無線史 全一三巻』

昭和25年12月〜昭和26年9月(図12・42)

昭和二十年代の無線経験者たちが総力を結集して編纂した日本の無線史の資料であり、無線史研究者の必読書とされている。

木村駿吉の活躍や秋山眞之の先見性や日本海海戦での無電についても、相当な詳しさと記されている。

海軍無線の歴史執筆にあたっては前記した伊藤庸二が占領軍に隠して保存した資料が有用だったらしい。

◇小森吉助『信濃丸敵艦隊発見の回顧』

五十周年記念海軍電波追憶集第一号

昭和30年(図12・43)

日本海海戦五十周年を記念して出された海軍無線の追憶集があるが、その中に、

山本英輔『無線電信の研究と改良並に諸規則』

谷惠吉郎『技 木村駿吉先生』

と並んで小森吉助による信濃丸の敵発見時の追憶談がある。

小森は日本海海戦当時、海軍少尉として「信濃丸」に乗り組んで活躍していた軍人なので、その実態をよ

く知っており、貴重な記録となっている。

山本英輔が木村駿吉を助けた功績は何度も言及した。谷惠吉郎は海軍の無線研究者で戦後は大学教授としても活動した人で、明治期の無電の調査でも知られ、明治期の無電機を収集して自分の研究室に展示していたと言われる。木村駿吉を尊敬していた。

終戦によって現物資料は失われたが、駿吉らの活躍の歴史を知る貴重な人物であった。

◇広瀬正『敵艦見ユ』

雑誌「SFマガジン」昭和39年6月号

(図12・44)

日本海海戦を舞台にしたSFは、SFが普及して以後に多く書かれたが、その最初かも知れないがこの作品である。

誰が敵前大回頭を命じたかを主題にした、時間テーマSFの一種である。

広瀬正は何度か直木賞候補になった作家である。

◇田丸直吉『兵どもの夢の跡』私家本

『日本海軍エレクトロニクス秘史』原書房

私家本…昭和53年12月
原書房…昭和54年11月

(図12・45)



図12・45 田丸直吉「兵どもの夢の跡」
(昭和53年12月／海軍無電の歴史書)

アジア歴史資料センターによって防衛省に残る古い記録が公開されるまでは、この田丸本は日露戦争前後の無電開発に関する第一級の史料であった。

田丸直吉の履歴や人物については、第五章や第七章に記してある。

有能な技術将校で、戦前に海軍省の機密資料を閲覧

する立場にあったとき、明治期の資料をノートに写して保存した。戦後は沖電気の役員を務めたが、引退後に昔のノートを調べて私家本を作った。これが原書房から刊行された。

読むと、問題点をよく理解していると分かる。

私家本と原書房版は、ほとんど同じ内容だが、原書房の方には、他の人が集めた資料が付録として掲載されている。

山本英輔が記録した日本海海戦の無電や、木村駿吉による『無線電信之理論實驗及實地』などである。

◇津村孝雄『艦艇の無線兵器技術小史』

私家本…平成9年7月(図12・46)

戦時中海軍技術少佐として無線関係の仕事をしていた人が引退後に書いた本で、古い時代の無電機についての写真や回路図が有って貴重である。

津村は東工大の専門部電気を出て海軍技術研究所などで活躍し、戦後は日本無線の役員や上田日本無線の社長職を務めた。

技術将校としての職務の間に明治時代の資料を集めたようである。



図12・47 若井登「無線百話」
(平成9年7月)

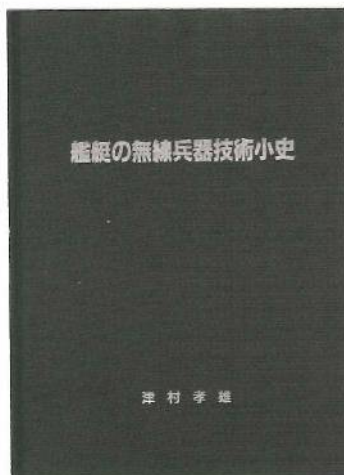


図12・46 津村孝雄「艦艇の
無線兵器技術小史」
(平成9年7月)

◇木村駿吉『精神的基督教』(復刻)
明治学院歴史資料館資料集4

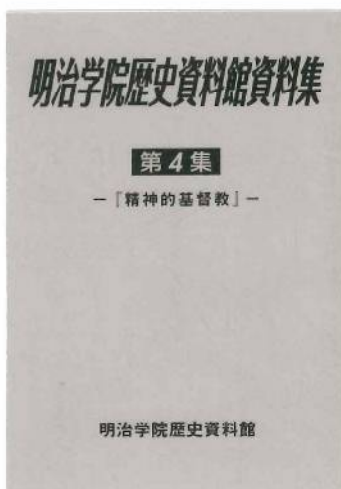


図12・48 木村駿吉「精神的
基督教」(平成19年3月)

◇若井登『無線百話』クリエイト・クルーズ
平成9年7月(図12・47)

著者は電波伝搬関係の研究者で、郵政省の電波研究所長を務めたのち東海大学の教授として活躍した人。

無線の歴史に詳しく、何人かと協力してこの無線史を執筆した。世界の無線史だが日本の初期無線にもか
なりの頁を割いており、松代松之助や木村駿吉や当時
の無電機のこと書かれている。

平成19年3月(図12・48)

若いころの木村駿吉が執筆した本(明治二十三年)が、歴史資料として復刻された。

◇佐藤源貞『アンテナ物語』里文出版

平成21年6月(図12・49)

元上智大学教授のアンテナの専門家で、アンテナ技研株式会社を設立して社長としても活躍した佐藤源貞による、アンテナの歴史の物語。



図12・49 佐藤源貞「アンテナ物語」(平成21年6月)

佐藤は日本海海戦時における木村駿吉の無電機にも詳しく、有用な歴史書である。

中には、木村駿吉の珍しい写真もあるし、また駿吉の遺族と秋山眞之の遺族とが横須賀の記念艦三笠で並んだ写真もある。

◇トマス・ピンチヨン(木原善彦訳)『逆光 上下』

新潮社・平成22年9月(図12・50)

ピンチヨンはアメリカの有名な文学者。SF作家でもあるが、幅広い作風を持っている。

この作品を全体として評価する能力は筆者には無いが、注目されるのは、この中に、若いころの木村駿吉や、駿吉が一時期熱中していた四元法やベクトル解析の話が出てくることである。むろん無電機開発の話もある。

駿吉が師事していたギブズの名も、共同研究者として出てくる。

むろん創作なので、史実とは異なるが、駿吉の業績について詳細な調査をしていなければ書けない内容である。

◎木村駿吉の住所の変遷

◇安政六年（一八五九年）



図12・50 トマス・ピンチョン「逆光」
(平成22年9月訳本)

木村駿吉の厳父の木村攝津守が長崎から江戸に戻り、浜御殿そばの「芝新銭座」に居をかまえた。

慶應二年もここに住んでいたらしいので、駿吉はこの場所ですまれたのであろう。

現在の港区浜松町で、浜御殿（現浜離宮）のすぐ傍である。

◇明治元年（一八六八年）

木村攝津守はこの年に隠居して、今の府中市に移転した。疎開に近い移転だったのであろう。

まだ幼い駿吉も一緒だったであらう。

◇明治四年（一八七一年）

木村一家は、この年、府中から四谷坂町に移転した。現在の新宿区坂町であらう。東京に戻ったわけである。かなり長くここにいたらしく、駿吉は小学校時代をここで過ごしたと考えられる。

◇明治十四年（一八八一年）

木村駿吉は予備門に入学したので、その寄宿舎に入った。

◇明治二十三年（一八九〇年）

駿吉は結婚して、本郷森下町の借家を新居とした。

◇明治二十六年（一八九三年）

この年駿吉はアメリカに私費留学したが、留学中の留守宅は四谷坂町だったらしい。

家族は借家からこの実家に移っていたのであろう。

◇明治二十九年（一八九六年）

この年の九月九日付けで駿吉は仙台の二高教授になった。そのため住居も仙台に移した。

海軍に出した履歴書では、

東京市本郷区丸山福山町十五番地在籍

宮城県仙台市清水小路四番地（現若林区）寄留

——となっている。

◇明治三十年（一八九七年）

この年、駿吉兄の木村浩吉が現千代田区の土手三番町に新邸を建てて、父の攝津守と同居した。

浩吉は少佐になっていて、多少のゆとりが出来たの

であろう。この場所は江戸時代に武家屋敷が多かったようである。

◇明治三十三年（一九〇〇年）

この年の三月七日付で、駿吉に二高から海軍に移籍する辞令が出た。

おそらくその少し前から駿吉一家は東京に戻っていたであろう。

旧居に戻ったのかどうかは不明。

◇明治三十六年（一九〇三年）

この前年の暮れに、外波内蔵吉と連れだつての海外視察から帰朝した。

この年から海軍教授から海軍技師になったが、その際の履歴書に、次のようにある。

原籍 東京市本郷区丸山福山町十五番地

寄留 東京市芝区下高輪町二十一番地

たぶんこの年の一月から横須賀で無電機の抜本改良に邁進することになった。

したがって一家を伴って横須賀に移転したらしい。

その住所は履歴書では、

三浦郡横須賀町中里五十九番地（上町緒明山）

——となっており、明治三十九年にベルリンの国際会議から帰国したときのインタビュー記事では、

横須賀市中里五十九番地

——となっている。

この場所は現在の横須賀中央駅の近くで、中央図書館のある辺りである。たぶん高台だったであろう。

◇明治四十五年（一九一二年）

この年の四月一日に、無電機研究のメンバーは、横須賀工廠から東京築地の海軍造兵廠の電気部に異動した。

したがって木村駿吉も東京に戻ったが、この頃に中野に自宅を建てたらしい。

◇大正四年（一九一五年）

木村駿吉は大正三年に健康上の理由で海軍を退官したが、その直後の特許申請資料の住所欄に、

東京府豊多摩郡中野町・・・

——とある。

また特許弁理士の事務所として、

日本橋区本草屋町三井第二号館

——が知られている。

◇昭和十三年（一九三八年）

この年没した時の記録として、中野桃園の自宅——とある。

横須賀から東京に戻って以来、ずっと同じ場所だったであろう。

現在ご遺族がおられる場所だったと考えられる。

◎木村駿吉の位階勲等の変遷

木村駿吉の位階勲等については、最大限官報によってチェックしたが、不明の点も多い。

◇明治二十三年八月（一八九〇年）

高等官五等

◇明治二十九年九月（一八九六年）

高等官六等

◇明治三十一年十一月（一八九八年）

高等官五等／正七位

◇明治三十三年三月（一九〇〇年）

高等官五等／從六位

◇明治三十四年十月（一九〇一年）

高等官四等／從六位

◇明治三十六年一月（一九〇三年）

高等官四等／正六位

◇明治三十七年四月（一九〇四年）

勲五等雙光旭日章

◇明治三十八年五月（一九〇五年）

從五位

◇明治三十九年四月（一九〇六年）

勲三等旭日中綬章

◇大正二年九月（一九一三年）

高等官二等（勅任官）／正五位（正五位はもつと前
だったであろう）

◇大正七年より少し前

從四位